

# VIEW21

〈ビュー21〉

高校版

Volume 5

2014  
December

12月

## 「**学びなさい**」を経て 「**学びたい**」へ

特集

変化を生き抜く  
「軸」と「修正力」の育成②

### 動機と型の 質的転換を図る 教科指導

新課程 指導最前線  
新課程入試の出題予測と  
入試直前期の指導

指導変革の軌跡  
北海道  
釧路江南高校  
埼玉県・私立  
花咲徳栄高校

半歩未来を考える教育オピニオン  
スーパーグローバル大学事業で  
日本の大学はどう変わるか？

2014  
December

12月

高校版  
Volume

5

今月の表紙メッセージ

「学びなさい」を経て  
「学びたい」へ

◎「もっと知りたい」といった内発的な動機は、学びを継続させる強い「軸」となります。しかし、誰もが内発的な動機で学習を始めるわけではありません。いかにして、外発的動機から内発的動機へ学習動機の質的転換を図るか。今号の特集はその点も含め、教科学習における「軸」と「修正力」の育成について考えてまいります。

『VIEW21』高校版  
編集長 柏木崇

## 2 私を育てたあの時代、あの出会い

生徒も教師も成長する学校改革の真価を学んだ  
兵庫県立小野高校 校長◎原 潤之輔

## 4 特集

## 変化を生き抜く「軸」と「修正力」の育成② 動機と型の質的転換を図る 教科指導

- 6 卒業生が振り返る 先生の授業を通して私たちの中に生まれた「軸」と「修正力」  
福井県立若狭高校 中森一郎 / 福井県立若狭高校卒業生 上野真史、道下拓毅
- 8 座談会 思考レベルに応じた多彩な教科指導で「軸」と「修正力」を育む  
栃木県立黒磯高校 齋藤良則 / 福井県立高志高校 山内 悟  
愛知県立成章高校 鈴木孝育 / 三重県立四日市南高校 中村陽明
- 12 学校事例① プロジェクト型英語学習で、「軸」と「修正力」を支える汎用的能力を育む  
茨城県立竹園高校
- 16 学校事例② 基礎学力の養成を通して自発的学習意欲の発現を待つ  
島根県・私立松江西高校
- 20 学校事例③ 「論理性」を重視した現代文指導で次代を生き抜くたくましい「軸」を育む  
熊本県立済々黌高校

## 24 新課程 指導最前線

## 新課程入試の出題予測と入試直前期の指導

数学 茨城県立下妻第一高校 飯泉雅明 / 物理 長崎県立諫早高校 後田康蔵  
化学 兵庫県立宝塚北高校 小宮山宏之 / 生物 石川県立金沢錦丘高校 西川祥司

## 30 指導変革の軌跡

## 北海道釧路江南高校

単位制高校の進路指導◎生徒と徹底的にかかわる体系立った指導で主体的な進路意識を育む  
埼玉県・私立花咲徳栄高校  
アクティブラーニング◎生徒の活動中心の授業に全校を挙げて切り替え自ら学ぶ姿勢を育てる

## 38 生きたデータの徹底研究

## 3年生0学期の保護者への働き掛け

## 42 半歩未来を考える教育オピニオン

スーパーグローバル大学事業で日本の大学はどう変わるか？  
文部科学省 高等教育局 高等教育企画課 国際企画室室長 ◎松本英登

## 46 未来をつくる大学の研究室

物体と接触して得られる感覚を再現し、疑似体験のリアリティーを追究  
筑波大大学院 システム情報系 岩田洋夫研究室

## 50 VIEW'S REPORT

アカデミックな学び、国際ボランティアなど、高校生の短期留学を強力バックアップ！  
「トビタテ！ 留学 JAPAN 日本代表プログラム高校生コース」募集開始  
文部科学省 初等中等教育局 視学官◎河村裕美

## 56 Reader's VIEW

<http://berd.benesse.jp> 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

\*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます  
\*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製および転載を禁じます

今、振り返る教師としての原点

私を育てた  
あの時代、あの出会い

# 生徒も教師も成長する 学校改革の真価を学んだ

兵庫県立小野高校 校長 原 潤之輔

校長の強力なリーダーシップの下、教師が一体となって挑んだ学校改革。わずか3年間で「進学したい学校の1つ」に生まれ変わった背景には、短期間でも結果を出すための、様々な取り組みの工夫があった。今、校長として改革を推進する原先生の原点に迫る。

## 改革中から情報発信



兵庫県立神崎高校に私が教頭として赴任したのは、当時の校長・増尾禮二先生が主導する改革の2年目です。増尾先生も私も柔道の指導者で、先生の指導力の高さは以前から耳にしていました。先生のそばでその手腕

を見るのが出来るのは、自分の力を伸ばす好機だという期待がありました。

1年目の徹底した生徒指導により、学校はだいぶ落ち着いていました。長く続いた荒れのため、地域は学校に不信感を抱いていました。「悪いことは全て本校の生徒のせい」にされて悔

しくはないのか」。増尾先生は生徒や教師にそう言い、「責任は私が取る」と地域と連携した活動を次々に打ち出しました。

「デイスカバリ村」は、増尾先生が学校に合う事業を探し出し、文部科学省の指定を受けて始めた事業です。生徒が地域の協力を得て、廃屋を改築した宿泊施設で、地域住民と一緒にしめ縄や漬け物をつくるなど、地域交流の拠点としました。

また、部活動の活性化のために、県内で部の数が少ない、自転車競技部、ゴルフ部、射撃部をつくりました。道具は増尾先生が自らケーブルテレビで呼び掛けて不用品を寄付してもらい、指導は地域や知り合いの競技者に依頼しました。更に、清掃ボ

ランテアや地域の幼稚園で児との交流なども行いました。すごいと思うのは、進行中の改革を成果も出ていないうちから地域に発信していったことです。増尾先生が自ら学校新聞を書き、それを町の掲示板に貼ったり、中学校に配布したりしました。病院や商店など人の集まる場所にも置いてもらいました。

「学校が変わろうとしている」という期待感が中学生や保護者の学校に対する見方を変えたのでしよう。改革2年目の入試で定員割れが解消。翌年の入試では、特色選抜で県内公立高校トップの4・13倍を記録したのです。

## 知恵を尽くして考える

教頭として増尾先生のアイデ

アを具現化し、生徒が生き生きした姿に変わっていくのを見て、私は改革を進める上で大切なことを学びました。その後、4校の校長を務めました。指導困難校でも進学校でも、経営の基本はそこにあります。

まず、共通の危機感を持つことです。学校は1人では変えられず、周囲の協力が必要です。同じ方向に進むためには、同じ原動力が必要であり、危機感は何より人を動かします。初めて校長として赴任した夢前高校は荒れがひどく、定員割れが常態化していました。私は赴任の挨拶時、先生方に改革案を示し、自ら先頭に立って進める意志を伝えました。そして、朝は先生方と一緒に校門に立って生徒指

## 先輩教師の言葉

改革推進の鍵は  
共通認識と  
協働実践にあり

兵庫県・私立神港学園神港高校 校長 増尾禮二



学校改革をスピーディーに進める鍵は、共通認識と協働実践にあると考えています。その点で、学校内だけでなく、地域とも共通認識を持てたことは、神崎高校の改革の大きな力になりました。

赴任時、私は自治体や商工会議所を訪れて改革の強い決意を伝えました。すると、「学校が悪くなったのは、地域にも責任がある」と、地域の方々がデイスカバリ村や清掃ボランティアなど、様々な活動を一緒に進めてくれたのです。その様子を学校新聞などで伝えることで応援の輪が広がっていき、地域との触れ合いが深まるに連れ、生徒は次第に自信を持つようになっていきました。地域との連携な

左 ますお・れいじ 兵庫県立神崎工業  
高校、小野高校等を経て、神崎高校校  
長に。西脇工業高校・加古川西高校校  
長、明石市教育委員会生徒指導支援担  
当課長を務めた後、2014年から現職。

右 はら・じゅんのすけ 英語科。兵庫  
県立教育研修所、神戸聾学校（現・神  
戸聴覚特別支援学校）等を経て、神崎  
高校教頭に。夢前高校、加古川北高校、  
豊岡高校の校長を務めた後、現職。

撮影◎神港学園神港高校にて



導を行い、行動でも意思表示を  
して、意識を浸透させました。

地域から注目されるような取  
り組みは、改革の推進力になり  
ます。加古川北高校では、グロー  
バル化を推進するために受け入  
れていたフィンランドやドイツ  
などからの留学生には、部活動  
にも入ってもらいました。また、  
アメリカ人を理科の実験助手に  
迎え、バスケットボール部の顧

問もお願いしました。通学時だ  
けでなく、放課後、グラウンド

で外国人と生徒が一緒に練習を  
している姿を見れば、学校の取  
り組みをすぐに分かってもらえ  
るからです。

普段から、先生や生徒と共  
に行動することも心掛けまし  
た。草むしりをしながら雑談を  
し、その会話から先生方の思い  
を聞き取っていく。生徒の良い

ニュースがあれば、みんなに伝  
え、褒めたたえる。そうした心

の交流の積み重ねが、信頼感を  
生むのだと思います。

校長の赴任期間は3〜4年と  
短いものです。しかし、知恵を  
尽くして実行すれば、結果は出  
ます。増尾先生はよく言ってい  
ました。「何でも実行せなわか  
ん」と。

神崎高校の自転車競技部は、

創部2年目に全国大会出場を果  
たしました。その生徒は、大き

な自信を得て勉強にも積極的  
になり、大学に進学して教師に  
なりました。増尾先生と共に改  
革を成し遂げた先生方の多くが  
今は校長となり、学校経営に尽  
力しています。生徒も教師も大  
きく成長していく。これからも  
そうした学校づくりをしていき  
たいと思います。

くして、学校改革はありえま  
せんでした。

改革には校長のリーダー  
シップが重要ですが、1人で  
成し遂げられるものではなく、  
生徒や教師と力を合わせて  
進めなければなりません。  
原先生には、他の先生方を束  
ねて、様々な取り組みを実現  
する役割をお願いしました。

私はせっかちで思い立った  
らすぐに実現したいというタ  
イプですが、原先生は仕事が  
早く、夕方に頼んでおいた書  
類が翌朝には出来ていること  
もよくありました。また、ディ  
スカバリー村などは、私の思  
いを酌みつつ、彼なりの工夫  
のある活動になっていまし  
た。そういった熱意は頼もし  
く、改革が進むに連れ、何で  
も安心して任せられるブレ  
ンとなっていきました。

予算や人事などの壁があり、  
通常なら実現が厳しいと諦め  
てしまいそうなことでも、校  
長の裁量で解決できる問題も  
あります。私は、原先生に自  
分の仕事を見せることで、校  
長には何ができ、また何をす  
べきなのか、学校経営の全て  
を伝えていきました。それを  
彼なりに消化し、校長として  
学校改革に生かしてくれてい  
ることは、頼もしい限りです。

特集

変化を生き抜く「軸」と「修正力」の育成②

# 動機と型の質的転換を図る教科指導

学習においても、目標や目的、信念、こだわりといった「軸」があることで、学習を力強く進めることが出来る。また、授業進度や自身の学力の変化、学習内容の質的・量的変化への対応力、すなわち、「修正力」も求められる。そこで今号では、教科学習における「軸」と「修正力」、そしてそれらを育むために必要な指導について考えていく。

## 学校段階が上がるに連れて、低下する学習への内発的動機

Q. あなたが勉強しているのは、どうしてですか。勉強する理由について、お答えください。



注) 「とてもそう」+「まあそう」の割合(%)。選択肢は「とてもそう」「まあそう」「あまりそうでない」「ぜんぜんそうでない」の4段階。  
出典/ベネッセ教育総合研究所「第2回子ども生活実態基本調査」(2009)

8~2月号の共通テーマ

## 10年後を見据えた人材育成

8月号で  
見えてきたこと

- ◎今後10年間も、変化の激しい社会であることが予想される
- ◎そのような社会を生き抜くためには、自分の中に、変化に流されない「軸」（目標や目的、信念、こだわりなど）を持つこと、そして、その「軸」に基づいて柔軟に変化に対応する「修正力」が求められる

本号のテーマ

## 教科学習において、生徒の中に「軸」を育み、「修正力」を高めるために必要な指導とは？

### 求められるのは、学習の「軸」となる“学習動機”と 学びや思考の“型”を質的に転換させる指導



「教師には、教科の専門性を土台に、どんな力を付けさせたいかをデザインした上で、生徒主体の活動を通して一人ひとりが成長の実感と自己肯定感を得られるようなファシリテーターとしての役割がますます求められる」

福井県立若狭高校定時制教頭  
中森一郎

▶卒業生が振り返る【P.6~7】

「生徒の中にやらされ感を募らせないためにも、確かな学習の成果が必要」

栃木県立黒磯高校教頭 齋藤良則



「低次の思考と高次の思考の両方を必要とする授業を低学年次から目指す」

福井県立高志高校 山内 悟



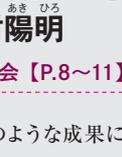
「生徒同士が“仲良く”切磋琢磨して学び合う環境を整えてやるのが大切」

愛知県立成章高校 鈴木孝育



「厳しい状況の中で踏ん張り、何かを成し遂げる成功体験を学習においても積ませたい」

三重県立四日市南高校 中村陽明



▶座談会【P.8~11】

#### 茨城県立竹園高校

【P.12~15】

プロジェクト型英語学習

◎今の学習と将来の自分との関連や、毎日の授業の積み重ねがどのような成果に結び付くのかを、入学時にしっかり説明する

◎生徒に考えさせる発問や創造力を発揮したくなるような課題を与えることで、自分の考えを持つように求めると共に、学び合いや発表を通じて、多様な考えに触れさせ、考えに幅と深みを持たせる

#### 島根県・私立松江西高校

【P.16~19】

基礎学力の養成

◎達成感を味わわせやすい「基礎力養成」「学び直し」「語彙力養成」にまずは強制的に取り組ませる。その中で「分かる」「出来る」という自己肯定感を持たせ、学習動機を「もっと学びたい」といった内発的動機に転換させる

◎学習動機の転換が起きなかった生徒に対しては、教師がじっくりと見守りながら、小さな成功体験を積み重ねていく中で、次なる生徒の変化を待つ

#### 熊本県立済々黈高校

【P.20~23】

「論理性」を重視した現代文指導

◎現代文の学習の軸を「論理性」に置き、それに基づいた現代文の学習方略の修正を、入学時から行う

◎授業や課題において、論理的な読解が出来ているかを問う設問に何度も取り組ませる中で、論理的な思考の型に気付かせる

## 卒業生が振り返る

# 先生の授業を通して

# 私たちの中に生まれた

# 「軸」と「修正力」

高校教育における本丸とも言える教科指導。教科学力の育成のみならず、大きく変化する社会で必要な汎用的な学びの型・思考法を

生徒に身に付けさせることは重要なテーマだ。教室での学びの中の「軸」と「修正力」の涵養の有り様を卒業生との対話の中に探した。

## 集団の中で自ら学ぶ姿勢を身に付けさせたかった

**道下** 僕と上野君は理数科（当時）の同級生で、2・3年生の時に中森一郎先生に担任をしていただきました。国語の教科担任も中森先生でしたが、先生の授業は生徒が考える時間が多かったと思います。国語は、きちんと論理的に読めば、ちゃんと答えにたどり着ける教科なのだと思生

**上野** グループで考える時間が多かったことが印象に残っています。僕は国語が得意ではなかったのですが、先生の問いに対して、みんなが話し合いながら論理的に考えて答えにたどり着こうとしていました。**道下** 本文の要約にも多く取り組みました。僕も国語が苦手だったので、他人に的確に伝わる文章を書くのにとても苦労しましたが、全体の中から大切な部分を見抜き、説明する力が養えたように思います。

**上野** 先生は、自ら考えることをとても大切にしていました。国語が苦手だった僕は、グループで考える時、つい誰かの意見に安易に賛同しがちでした。そうした時、先生に「君自身はどう考えているんだ？」と問い掛けられました。**中森** 自ら学ぼうとする力の育成は、当時も今もとても大切になります。簡単に答えを与えるのではなく、苦労して自分の答えにたどり着く授業になるように配慮していまし

た。そして、一人ひとりの考えを全体で共有することで、各自が自分の答えを更に深めるような授業構成を心掛けていました。クラスが全体として育つ授業でなければ、学校で学ぶ意味がないという強い思いがあったからです。**学びの型を修正する**  
**コーディネーターを目指す**  
**中森** 担任として意識していたのは、「学びのコーディネーター」に



福井県立若狭高校定時制教頭  
中森一郎

なかもり・いちろう 教職歴29年。同校の全日制に1997年～2005年に勤務。2013年に定時制の教頭として再赴任。国語科。



福井県立若狭高校卒業生  
上野真史

うえの・まさし 山梨大工学部機械工学科卒業後、同大学院医学工学総合教育部修士課程を修了。若狭高校在学時はバスケット部に所属。医療機器メーカーに勤務し、精密医療器具の開発に従事。社会人歴3年目。



福井県立若狭高校卒業生  
道下拓毅

みちした・ひろき 神戸大農学部生物機能化学科（現・生命機能科学科）卒。若狭高校在学時はテニス部に所属。食品メーカーに勤務し、機能的食品の生産技術開発および生産管理に従事。社会人歴5年目。

## 福井県立若狭高校

◎1897（明治30）年創立。2011年度からスーパーサイエンスハイスクール指定校。◎全日制・定時制／普通科・文理探究科・商業科・情報処理科・海洋科学科／共学／生徒数は1学年約300人。◎14年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、京都大、大阪大、金沢大、福井大などに81人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大などに延べ242人が合格。



なることでした。生徒との面談では、国語に限らず各教科の勉強のやり方を聞き、その生徒に合った学習法と一緒に検討しましたし、学習に関する生徒の悩みをまとめて、該当教科の先生に伝えたこともありました。

**道下** 僕らのクラスだけ、中森先生の発案で、各教科の授業評価をやったこともありましたよね。

**中森** 各教科の先生の指導力を更なる高めるきっかけにしてもらいたかった。

たし、君たちにとっても自分の学習の姿勢を修正する良いチャンスになると考えたからです。また、定期考査の2週間前から、学習の予定と結果を記録する学習計画表を毎日回収していましたが、それは学習をテーマにした交換日記のような存在でした。10人程の生徒は、テスト期間以外でも毎日記録し、私に提出していました。

**上野** 僕もその1人です。部活と勉強の両立や、テスト成績の伸び悩みなど、いろいろなことを書いて、先生に相談しました。学習面で自分に自信が持てず、気分が沈みがちでしたが、学習に関する思いを先生に聞いてもらったのは、僕にとって大きな支えになっていました。

**道下** 僕はテスト期間に学習計画表を使いましたが、成果を検証し、次の計画作りに生かすことが習慣化できたと思います。

### 異質を受け入れ、力とする 軸を生徒に育みたい

**中森** 若狭高校では20年以上前から、2年生の夏休みに全員が夏目漱石の『こころ』を通読した上で、2学期に作品全体を扱う授業を展開するのが伝統になっています。君たちも取り組んだこの学習は近年、「どのような問いを立てればより良い読解が実現するか」を生徒が協同して考えるという観点で更に研究・開発が進められているのです。学ぶ目的を生徒自身が明確にし、主体的に学び続けていく力を身に付けるための新しい試みです。

**道下** 10年前の中森先生の授業でも、みんなと話し合って、自分の答えを練り上げ、生徒が授業を創っていたように思います。今思うと、先生の授業は、答えのない問題が山積する現代社会で、目の前のテーマに対して自分なりの答えをストーリー立てて創っていく力を身に付けるものだったんですね。僕にとって、答えのないテーマを仲間と議論するのはとても楽しく、国語の学習の動機付けにもなりました。きっと今の若狭高校の授業は、僕らの時以上に楽しくなっているのでしょうか。

**上野** 授業で、自分の意見を受け入れてもらう経験をしたから、僕もしっかりと考えた上で違う意見を受け入れることが出来るようになり、自分の考えを修正できる力が身に付いたのだと思います。今、僕は開発の仕事に就いていますが、ささやかなアイデアを否定しない態度が、新しい発見につながることを体験しています。僕の勤める会社はグローバル化を進めています。異質なものも理解して、それを自分の力とすることは、今後ますます必要な軸になると感じています。それは、若狭高校の教育目標の「『異質のもの』に対する理解と寛容の精神」を養うことと同じだと思います。

**中森** 私たち教師には、教科の専門性を土台に、どんな力を付けさせたかをデザインした上で、生徒主体の活動を通して一人ひとりが成長の実感と自己肯定感を得られるようなファシリテーターとしての役割がますます求められるのだと思います。2人と久しぶりに話をして、改めてそう思いました。ありがとうございます。

# 思考レベルに応じた 多彩な教科指導で 「軸」と「修正力」を育む

変化の大きな社会を生き抜くために必要な「軸」と「修正力」。  
高校生活の中でこれらを育む上で、教科学習はどのような役割を果たしていくのだろうか。  
入試で求められる教科学力を身に付けさせながら、生徒の10年後につながる教科指導を展開するために、  
現場ではどのような創意工夫が行われているのか、4人の教師が語り合った。

## 外発的動機から内発的動機へ 学習の軸の質的転換が必要

**編集部** 教科指導において、今後生徒に必要な「軸」と「修正力」をどのように育むかが今回のテーマです。まず、自分で学習を進めていく上で必要な目的やこだわり、すなわち「軸」を生徒にどのように育んでいるのかをお聞かせください。

**齋藤** 多くの高校では、1年生への初期指導を通して「高校ではこれだけの学習量を確保しよう」「予習↓授業↓復習を習慣にしよう」と生徒

に伝え、学習状況調査などでチェックしています。言わば、教師による外発的な動機付けでの学習の軸づくりです。しかし、外発的動機付けだけで学習のモチベーションを維持することは困難です。生徒の中に「もっと学びたい」という気持ちを生む内発的動機付けも行うことで、高校3年間でより太い学習の軸が出来るのではないのでしょうか。

**山内** 高校生になると学習量が増えることを初期指導で伝えることは大切ですが、ただ、伝えただけで「とにかく3年間頑張れ」という指導では、



栃木県立黒磯高校

齋藤 良則 さいとう・よしな

教職歴33年。同校に赴任して1年目。教頭。栃木県立大田原高校に21年間勤務後、現職。担当科目は物理。  
栃木県立黒磯高校◎1925（大正14）年創立。14年度入試では、国公立大は、山形大、福島大、宇都宮大などに37人が合格。私立大は、慶應義塾大、日本大、立教大などに延べ229人が合格（現浪計）。



福井県立高志高校

山内 悟 やまうち・まこと

教職歴27年。同校に赴任して5年目。SGH事務局長。担当教科は英語。  
福井県立高志高校◎1948（昭和23）年創立。14年度入試では、国公立大は、東京大、福井大、京都大、大阪大などに257人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ518人が合格（現浪計）。

従順な生徒たちはフラフラになってしまいます。「何のために学ぶのか」を考えさせる指導が重要だと私も思います。

**鈴木** 「高校時代はとにかく勉強して、先のことは大学に入ってから考えればいい」という考えがかつて社会全体にあったのは事実です。確かに「なぜ学ぶのか」といった問いに、生徒は「生きていくための素養、人間力を育むため」といった言葉でし



**愛知県立成章高校**  
**鈴木孝育** すずき・たかやす

教職歴31年。同校に赴任して15年目。進路指導主事。担当教科は国語。  
**愛知県立成章高校**◎1901（明治34）年創立。14年度入試では、国公立大は、名古屋大、京都大、大阪大などに74人が合格。私立大は、上智大、中央大、立教大、南山大などに延べ484人が合格（現浪計）。

か答えられないかもしれません。ただ、そうした抽象的な答えであつても、生徒自身から発せられたかどうかは大きな違いだと思います。「勉強しよう」と教師が言うことはもちろん必要ですが、それだけでなく、生徒に「言われたから勉強する」状態を超えさせることが必要なのでしょう。

**中村** 量も質も中学時代を凌駕する高校の厳しい学習に耐えることは、



**三重県立四日市南高校**  
**中村陽明** なかむら・あきひろ

教職歴15年。同校に赴任して1年目。担当科目は化学。  
**三重県立四日市南高校**◎1959（昭和34）年創立。14年度入試では、国公立大は、名古屋大、三重大、大阪大などに141人が合格。私立大は、慶應義塾大、同志社大、立命館大などに延べ846人が合格（現浪計）。

人生の様々な局面で踏ん張る力に結び付くはず。ただ、いつまでも教師が与えるのではなく、同じ目標の生徒が自然に集まって勉強をするなど、自発的な学習へ誘いたいものです。外発的動機から内発的動機による学習へと変化するタイミングは生徒によって違うからこそ、いつでも自分で学習のスイッチが入られるように、授業開きから学ぶことの意味を生徒に問い掛けるように心掛けています。

**齋藤** 8月号の特集では、「年齢と共に増える経験、身に付けた知識やスキルに応じて、進路選択の幅が広がるべきではないか」という問題提起がありました（本誌8月号P.9）。生徒が自分の中に学びの目的、軸を見付けることは、進路選択の幅を広げる意味でも重要だと思います。

### 異なる思考レベルを重層的に体験できる授業を

**編集部** では、外発的動機付けから内発的動機付けへの転換は、教科指導の場面ではどのように仕掛けてい

くことが出来るのでしょうか。

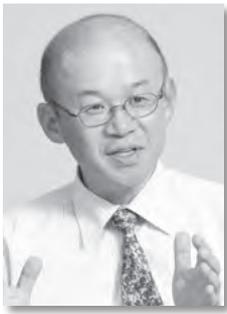
**山内** 英語学習における思考レベルには、単語や文法を覚えたり、それを当てはめて日本語に直したりする低次のものと、異なる考えなどを比較・解釈したり、自分の意見を述べたりする高次のものがあります。生徒が意欲的に学習に取り組むのは、高次の思考を求められた時であることは様々な研究で明らかになっています。実際、言いたいことをうまく伝えるために辞書を引いたり、友達と相談したりする学習と、具体的な目的が明示されないまま言われた通りに行うだけの学習とでは、理解の深さが異なります。高次の思考を求める学習を日々の学習に取り入れることで、学習の動機付けの質的転換が図りやすくなると思います。

**鈴木** 同じことは国語でも言えます。語彙力がなくと自己表現することとは出来ないですし、相手の話も理解できません。その気付きがあつてはじめて、基礎が必要なのだという学習への納得感が生まれます。また、授業や模試の問題などで良い作品に

出合えたことがきっかけで、読書が豊かになる生徒もいます。評論の授業で教科書の素材文について問いを発展させ、「このテーマにはこんな課題も隠れている」と問い掛けると、教科書の内容以上のことを自分で考えようとする生徒が出てきます。

**中村** 理科や数学は、答えだけでなく、答えに至るまでの過程も問われる教科ですが、グループで学習することで、「答えの導き方は多様である」ことを学び合うことが出来ます。また、学習内容が日常生活と結び付いた瞬間、知識が生きたものになり、高次の思考へと変わります。そうした体験が「もっと知りたい」という意欲につながるのだと思います。

**齋藤** 高次の思考を可能にするためにも、学習に対する自信、自己肯定感が欠かせません。それらを得るためには、ある程度の量をこなすことを生徒に求め、学習の質を高めるこ



「生徒の中にやらされ感を募らせないためにも、確かな学習の成果が必要」

齋藤



「低次の思考と高次の思考の両方を必要とする授業を低学年次から目指す」

山内

とが必要です。ただ、重要なことは、成果がいつまでも実感できなければ、生徒の中にはやらされ感ばかりが残ってしまうということです。成果を実感させられなければ、生徒の学びを継続し、高次の思考につながることは出来ないということは、現実的ですが、学びの本質にかかわることだと思えます。半面、成果を実感することで新しい課題にどんどん挑戦し、教師の想像を超える力を発揮した生徒を何人も見てきました。

**山内** 今、求められているのは、低次の思考と高次の思考が並行できる授業を、低学年次から行うことだと思います。従来の英語指導では、単

語や文法を身に付けてから、表現活動に移るという考えが中心でした。しかし、最初が知識注入一辺倒では、表現活動に入った時、生徒は「間違ったらどうしよう」と臆してしまいます。学年でバランスを変えるにしても、どちらかの活動だけに終始するべきではないでしょう。

「こうなりたい」という感情の高まりを逃さない

**編集部** 次に、教科学習で育む「修正力」について、先生方の考えをお聞かせください。授業進度や自身の学力の変化、学習内容の質的・量的変化に対して、予習・復習のやり方や学習内容の優先順位付けなどを修正すべき機会が生じます。「修正力」を身に付けるそのチャンスにどのような指導が求められますか。

**鈴木** 私たちはややもすると、多くの学習課題を生徒に与えること

で、生徒に手を掛け過ぎになりがちです。教師から与えられるのを待っているのではなく、自分の足りない部分を自覚し、それを優先的に学習する力を身に付けさせたいと誰もが思っているはず。10月号で紹介されていた札幌日本大学高校の「Masaki」（本誌10月号P.12）は、生徒が自分で理解不足の箇所を自覚し、優先的に取り組むべき課題を考える、学習上の修正力を高めるシステムとして好例でした。

**齋藤** 若い先生方には、個人面談の価値を大切にいただきたいと思います。学級担任との面談だけでなく、各教科担任との面談も実施し、学習上の目標と計画について生徒の考え、更には各教科に対する気持ちも聞き取っていくことが大切です。

**山内** 自分の成績を生徒がどう感じているのか、その気持ちを聞いていくのは重要だと思います。もっとこういうふうになりたいと生徒が望んだ時に教師が助言してこそ、良い影響を与えることが出来ますから。

**中村** 生徒が、「これだけやってるのに、なぜ成績が伸びないのだろう」と尋ねてきた時、初めて自己修



正のスタートラインに立つのだと思います。そうした気持ちになる前に教師がいくらアドバイスしても、生徒は聞き流すだけです。やはり生徒の状態の見極めが重要で、手を差し伸べるのをぐっとこらえなければいけない時も少なくありません。

**山内** ひたすら単語だけを覚えていく生徒が、長文を読めるようになりたいと望んだとしても、それはすぐ



「厳しい状況の中で踏ん張り、  
何かを成し遂げる成功体験を  
学習においても積ませたい」  
中村

**中村** 3年間しかない高校生活の中で、試行錯誤して何かを成し遂げるという体験を、部活や行事だけでなく、学習においても1つでも多く経

### 多様な人間関係の中で 学びの意欲を育みたい

には無理です。どのような力を付けたいかを本人に確かめ、どのように勉強を進めればそれが実現できるかを考えさせ、アドバイスしたいですね。どんな学習法がふさわしいのか、生徒自身が目的を踏まえて理解することが学力向上の第一歩です。

**鈴木** 教師が与える課題をこなささえすれば、学力が身に付くというものではありません。生徒が主体的に自己の課題を見付けて努力することはもちろん、教師もそのことを心に留めておきたいものです。



「生徒同士が  
仲良く、切磋琢磨して学び合う環境を  
整えてやるのが大切」  
鈴木

験させたいです。そうした多様な成功体験が、社会で壁に直面した時に突破する力になると思います。

**齋藤** 人生で直面する様々な課題に、自分の知識を総動員して向き合い、足りなければ周囲の手を借りながら解決する……そんな生き方が出来る生徒を育みたいですね。

**鈴木** 変化の激しい時代だからこそ、ぶれない学習の軸を維持するためには、信じ合い、支え合う仲間との邂逅かいこうが必要だと思っています。私たちは、生徒同士が健全な切磋琢磨せつさくたくまをして学び合う環境を整えてやること

急務ではないでしょうか。

**山内** 何のために学び、どこでつまずいているのかを、生徒が自己開示しながら励まし合い、修正し合えるクラスをつくりたいと私も思います。また、いろいろなテーマについて、他教科の先生や大学、地域の人たちと共に、英語を使って思いや意見を語り合い、答えを模索する場を日々の授業の中につくりたいです。

**中村** 難しいことを知ってさえいれば難しい問題が解けるということではなく、知っていることを上手に組み合わせ、活用できた時に難問が解ける……大学入試でも、社会の課題でも同じことが言えるのではないのでしょうか。日々の授業で、生徒がそうしたことを実感できる小さな手応えを積み重ねていくことで、生徒の学びの軸を太くしたいですね。

## プロジェクト型英語学習で、「軸」と

# 「修正力」を支える汎用的能力を育む

茨城県立竹園高校は、2006年から英語の授業で、プロジェクト型の「ACEプログラム」を取り入れている。ディベートやディスカッションなどで求められる力を、日々の授業を通して培っていくプログラムだ。より高次の能力が求められるプロジェクトへと、段階的に目標を高めていく中で、生徒は主体的に学習に取り組んでいる。

### 英語力の向上にとどまらず ジェネラリストを育成

多くの研究機関がある筑波研究学園都市の中心部に位置する茨城県立竹園高校は、県内屈指の進学校だ。2014年度大学入試では192人が国公立大に現役合格するなど、例年安定した進学実績を出している。同校では、どのような変化に対しても主体性を失わない「軸」と、変化に対応するための「修正力」は不可欠な関係にあり、同じ力や姿勢を支えられていると捉えている。3学年担当の植木明美先生はこう話す。

「教科学習で育める『修正力』とは、一言で表現すると『応用力』なのだと思います。英語におけるそれは、思考力、判断力、表現力であり、コミュニケーション力や発信力です。それらの力が身に付いてはじめて、どんな変化に対しても自己修正できるようになるのではないのでしょうか」

同時に、それらの力は、自分の価値観や意見、すなわち「軸」を形成する上でも必要であると、2学年担任の岡島岳暁先生は話す。

「『軸』をつくり、『修正力』を構成する様々な力を持つのは、特定分野だけに秀でたスペシャリストでは

なく、全体を俯瞰できるジェネラリストです。私たちが育てたいのは、専門人ではなく全人なのです」

そうした考えの下、2006年、英語の授業で「ACE (Approach to Communicative English) プログラム」を導入した。大学や社会に出てから必要な力を見据え、英語力にとどまらず、ジェネラリストの育成を目指す教育活動だ。学年ごとにプロジェクトを設定し、通常授業と相互に補完し合うことで、3年間を通して英語によるコミュニケーション能力や論理的思考力、発信力といった幅広い力を育てることが目的だ。

### 入学時の意識付けが 3年間の成果の鍵を握る

プロジェクトは、1年生はレシテーション・プレゼンテーション、多読、2年生はスピーチ・ディベート、3年生は模擬国連・ディスカッション・エッセイを設定している(図1)。各プロジェクトには数時間を充て、学級で発表などを行い、それ以外は教科書を使って授業を進める。プロジェクト、通常の授業共に、オール・イングリッシュで行われる。ACEプログラムの成否を左右するポイントは、入学時の意識付けだ。

学年が上がるに連れてプロジェクトで求められる能力のレベルは高まるため、初期につまずくと、段階的な



茨城県立竹園高校  
植木明美 うえき あけみ  
教職歴31年。同校に赴任して9年目。教育相談部長。「何事にもバランスが肝要」



茨城県立竹園高校  
岡島岳暁 おかじま たかさき  
教職歴20年。同校に赴任して6年目。2学年担任。「結果を焦らない。学びは無形財産、未来への共同投資」



茨城県立竹園高校  
宇野裕美 うの ひろみ  
教職歴6年。同校に赴任して2年目。1学年担任。「生徒に自分を偽らずに接し、生徒から学ぶ姿勢を持つ」

茨城県立竹園高校

- ◎ 国際理解教育や英語教育に力を注ぎ、国際社会をリードする人材の育成を図る。普通科と国際科を設け、2年生から学科・コース別の授業を展開する。2003年度〜2007年度スーパーサイエンスハイスクール指定校。
- ◎ 設立 1979（昭和54）年
- ◎ 形態 全日制／普通科・国際科／共学
- ◎ 生徒数 1学年約320人
- ◎ 2014年度入試合格実績（現浪計）  
国公立大は、北海道大、東北大、茨城大、筑波大、東京大、京都大、大阪大などに224人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田などに延べ909人が合格。
- ◎ URL <http://www.takezono-h.ed.jp/>

成長が期待しにくい。

入学時の生徒は、一定水準以上の学力を備えているが、英語に対する意識は様々だ。中には「英語は嫌いだけれども、仕方なく勉強している」という生徒もいる。プロジェクトでは、いかに分かりやすく表現するかを工夫する必要があるため、自分で調べたり、考えたりするなど、自ら取り組む姿勢がないと、大きな成果は得られない。そのため、1年生の最初の授業でオリエンテーションを行い、学習の意味をよく考えさせる。「目の前の学習と将来の自分との関連が具体的にイメージできることは、内発的な動機の支えとなります。ACEプログラムを通して身に付く力を明示し、それが大学進学を経て、社会に出てからも大いに役立つことを説明します」（岡島先生）

オリエンテーションでは、2年生や3年生の先輩がディベートやディスカッションを行っている様子を撮影したビデオを見せる。1学年担任の宇野裕美先生はこう説明する。「先輩の姿を通して、『自分も英語

が出来るようになりたい』という思いを持つことは、学習への強い動機付けとなります。プロジェクトで優れた成果を出すための力は、普段の授業の積み重ねによって培われることも強調して伝えます」

実際、通常の授業は、プロジェクト

トで求められる力を強く意識した内容だ。例えば、1年生の授業では、レシテーションに備えて多読をしたり、プレゼンテーションのための素材集めや意見形成の要素を取り入れたりしている。授業中、「この学習はプレゼンテーションで役立つ」な

図1 「ACEプログラム」3年間のカリキュラム

	1学年	2学年	3学年
到達目標	①論理的にまとまりのあるプレゼンテーションが自信を持って原稿を見ないで出来る。 ②多くの英文（5万語以上が目標）を読み、英文を読むスピードを速くすることが出来る。	①相手の意見にその場で対応しつつ、その意見を踏まえ、論理的に自分の意見を主張できる。 ②ディベートの内容について、自己の主張が一貫した文章で書ける。	①与えられたテーマについての英文を読み必要な情報を得ると共に、お互いの意見を尊重して合意を形成するために話し合うことが出来る。 ②ディスカッションのテーマについて、自分の意見を論理的にかつ正確に書くことが出来る。 ③大学入試レベルの英文を速く、正確に読むことが出来る。
プロジェクト	①レシテーション ②プレゼンテーション ③多読	①スピーチ ②ディベート	①模擬国連 ②ディスカッション ③エッセイ
下位目標	1 大きな声で発話できる。 2 相手に通じる明確な発音が出る。 3 必要な情報を収集できる。 4 論理的にまとまった英文を書くことが出来る。収集した情報をプレゼン用原稿としてまとめることが出来る。 5 アイコンタクトをしながらはっきりとした大きな声で発表出来る。	1 英語を聞きながら、要点を押さえた効果的なノートテイキングが出来る。 2 教科書の文章やそれに関連する題材について、筆者や話し手の主張をしっかりと捉えた要約が出来る。 3 あるトピックについて収集した情報を客観的に分析し、活用できる。 4 あるテーマについて、客観的な視点から自分の意見を論理的にアウトプットできる。 5 相手の意見に対し、その論理性を分析し、即座に自分の意見を主張できる。	1 お互いに意見の違いを理解した上で、合意を形成するために話し合うことが出来る。 2 書いた英文を見直し、表現や文法を自らお互いに訂正することが出来る。 3 センター試験レベルの英文を180wpm以上の速度で読むことが出来る。 4 国公立大個別学力試験レベルの英文を正確に読むことが出来る。

\*学校資料を基に編集部で作成

どと伝え、プロジェクトとのつながりを意識させる。

2年生、3年生の授業では、教科書の本文を読んだ後、5W1Hを押さえる本文に関する事実確認をしてから本文の要約を記述する。その一連の作業を通じて、簡潔に要点を説明したり、物事を抽象化して捉えたりする力を育てる。次に、本文のテーマに関する情報を集めて分析し、考えに幅と深さを持たせた後、グループディスカッションを行い、本文のテーマについての各自の意見を深め合う。そうした授業を繰り返すうちに、生徒の意識は「教科書の内容を勉強する」から、次第に「教科書を材料として力を付ける」に変わっていく。その変化から主体性の育ちが見て取れると、同校は考えている。

### 答えのないテーマの議論が 社会で働くための訓練に

学習に向かわせる仕掛けとして、生徒の学び合いを促している。

1年生から、授業冒頭のウォームアップや予習の答え合わせ、授業中の意見交換など、ペアワークやグループワークを頻繁に取り入れてい

る。そうすることで、学び合いの時に以外でも分らないことがあると友だちに相談したり、教え合ったりする姿が見られるようになるという。

1年生のレシテーションでは、クラスメートの前で2分間の暗誦あんしゅうを行うが、初めてのプロジェクトとあつて不安を感じる生徒は少なくない。

「発表では、つかえたり間違えたりした生徒に対して、周りから励ましやアドバイスなどの声が自然に起ります。そういった温かい雰囲気を感じ取り、自信がなかった生徒も前向きな気持ちで発表に臨むようになるのです」(宇野先生)

最初にレシテーションを体験すると、生徒の意識は大きく変わると、植木先生も説明する。

「人前で表現をすると、心が解放されて自信が付き、自己肯定感が高まる効果があると考えています。そうした気持ちや、間違えても受け入れてもらえるという安心感が支えとなり、次の活動にも前向きに取り組みむという好循環が生まれています」

他者の発表を見ることも大切な学習だ。発表を注意深く観察して、多くのことを学び取れるように、「エ

バリエーション・シート」を用意して、生徒が相互評価するようにしている。例えば、レシテーションの評価では、正確性や発音、音量、感情が込められていたかなどを、それぞれ5段階で評価する。

「仲間の素晴らしい発表に触発され、期待を大きく上回るパフォーマンスを見せてくれる生徒は少なくありません」(植木先生)

グループの協同作業は、学習への動機付けとしても機能している。例えば、デイベートは、個々の生徒が準備した材料を基にチームで戦略を立てるため、「チームに貢献したい」という思いが生まれやすい。逆に、意欲の低い生徒には、チームのメンバーが「きちんと用意してほしい」などと言ってお互いを指摘し合い、それが非常に効果的だったという。

あらゆる場面で生徒に考えさせることも、前向きな姿勢を引き出すための工夫だ。例えば、教科書の本文を読んだ後、「あなたはこう思った?」「あなたならどうする?」などと発問し、自分の考えを持つように求める。更に、ペアやグループで意見交換する機会を多く設けている

ことも、各自の考えを深めさせるという点で役立っている。

「デイベートでは、白黒がはっきりしないテーマを取り上げています。生徒は、友だちの意見を聞いて『そういう考え方もあるのか』と見方を広げたり、根拠を持って説明することを通して自分の考えに自信を深めたりします。社会に出てからの仕事では、正解のないテーマに取り組みむことばかりです。プロジェクトは、そのための良い訓練になると考えています」(植木先生)

### 創造力を発揮したくなる 課題で学習意欲を引き出す

A C Eプログラムでは、ワークシートを学年統一で用いる。どの生徒もプロジェクトで一定水準のパフォーマンスが出せるよう、授業の内容や進度をそろえるためだ。更に、プロジェクトの実施によって授業進度が遅れないよう、プロジェクトを効率良く進めるためでもある。

ワークシートは、教科書の内容を基に、英語科の教師が分担して作成する。フォーマットは、学年によって多少異なるが、「Words」「Warm-

図2 復習のワークシート例

【 ESSAY 】 Class No. Name \_\_\_\_\_

Describe "War (Peace)" and share your ideas with at least three people.

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

[ Explain why ] \_\_\_\_\_

[ Japanese translation ] \_\_\_\_\_

[ Examples ]

Mankind must put an end to war or war will put an end to mankind. - John F. Kennedy  
人類は戦争を終わらせなければならぬ。さもなければ戦争が人類を終わらせるだろう。

If everyone demanded peace instead of another television set, then there'd be peace. - John Lennon  
もし、皆が新しいテレビの代わりに平和を求めれば、平和は実現されるだろう。  
(2013年産1年生 選考作品)

Mankind lives using techniques to kill mankind. Peace cannot be established on this contradiction. 2組  
人を殺した技術を使って人は生きている。この矛盾の上に平和は成立しない。

Nothing is more uncertain than "justice". A conflict between justice and another justice makes a war. 7組  
正義とは何よりも不確かなものである。正義と正義の対立が争いを産むのだから。

War is like a mirror. We will see our true but ugly mind in it. 9組  
戦争とは鏡のようなものだ。人類はそこで己の本来の醜い姿を見ることが出来るだろう。

Exchange your sheets with your classmates. Correct their English if you possibly can.  
Grade their work in the following way.

Unique / Creative / Understandable / Poetic

Grader	Grade	Notes / Comments

課題として考えてきた作品を、グループ内において、Unique (独自性)、Creative (創造性)、Understandable (分かりやすさ)、Poetic (想像性)の観点で評価し合う。 \*学校資料をそのまま掲載

up]「Comprehension」「Summary」「Discussion」「Further Reading」といった共通の要素で構成される。予・復習の内容もワークシートに盛り込んでいる。例えば、1年生で戦争に関するテーマを扱った授業の復習では、自分の意見を短文で記述する課題を出した(図2)。前年度の優秀な作品を掲載し、具体的なイメージを与えると共に、高い目標を持たせている。その例に限らず、生

徒が創造力を発揮したくなるような様々な課題を設定している。「創造力が必要な課題を出す」と「良い作品を作りたい」といった内容的な動機につながります。持ち寄った作品は、グループ内で見せ合い、代表作品を選んで学級で発表します(岡島先生)

他の学習場面でも、生徒が学びたくなるような素材を用意する。例えば、授業や試験で扱う例文は、あり

きたりの内容ではなく、生徒が覚えなくなるような文章を厳選して載せる。レシテーションでは、様々な映画から12シーンを抜粋し、生徒が好みの1つを選ぶようにした。

### 失敗経験を積み重ねたくましさも育つ

ACEプログラムは、思考力や表現力、コミュニケーション能力といった汎用的能力の育成に力点を置いたため、成果は目に見える形で表れにくい。しかし、教師たちは授業を通し、生徒たちの明らかに変化を感じ取っている。

ACEプログラムの導入当初は、デイベートやディスカッションなどがなかなか活発にはならなかった。そこで、ノートテイキングやリスニング、発表など、アウトプット主体の学習を授業で充実させた。すると、次第に一人ひとりのアウトプットは、質・量共に大幅に改善した。

また、授業やプロジェクトを通して、たくましさも育つという。「思い通りに発表できず、自己嫌

悪に陥る生徒もいます。それでも、みんなが頑張っている姿を見たり、友だちからフォローされたりすることで、「自分は1人ではない。諦めずに頑張ろう」と前向きに頑張るようになりまます。そうした体験は、生きていく上での軸の形成につながると思いますし、仲間と協力して新しいものを生み出す姿勢は、変化を求められる場面に遭遇した時に必ず役に立つはずですよ(植木先生)

同校は、大学に入ると留学する卒業生が多いが、それもACEプログラムの通して培った自信や精神力が一因ではないかと捉えている。

卒業生からは、「高校の英語の方が大変だった」「デイベートの経験が役立っている」といった声が寄せられている。更に、大学の授業でデイベートを行う時、中心的な役割を担っている卒業生が多いという。

ACEプログラムは、教師にとっても生徒にとっても、決して負担は軽くない。しかし、生徒の意識や学習姿勢の変化を通して、同校は取り組みの確かな手応えを感じている。

## 基礎学力の養成を通して

# 自発的学習意欲の発現を待つ

松江西高校では、教師による外発的動機付けによって学習面での自己肯定感を高めながら、キャリア教育によって自ら学習を継続していく力を持った生徒へと成長させていく教育フローを展開している。学習全般に対して苦手意識を持った生徒をどのように支え、学習の軸をつくっているのか。生徒の変化をつぶさに観察し、軸の形成を根気強く待つその指導について、主に初期の学習指導を中心に聞いた。

### 基礎学力を身に付け、 「未見の我の発見」を実現

創立90周年を機に、現代の社会環境を踏まえて「育てたい生徒像」を「基礎・基本を身につけ、将来像をもった明るく活力ある生徒」と改めて明文化した松江西高校。その実現のため、基礎（学力）の確立の具体的方策として、「基礎力養成」「学び直し」「語彙力養成」という3つの取り組みを打ち出している。そのいづれもが、授業や朝学習、補習などでの教師の外発的な動機付けによって行われる取り組みである。

塩冶静雄校長は「勉強に苦手意識を持つ生徒に、やれば出来る、分かる、面白いという自己肯定感を抱かせるためには、最初は強制的に取り組ませる必要がある」と説明する。

「本校に入学してくる生徒は多様で、1年生の段階では高校で必要な基礎学力や基本的な学習習慣が身に付いていない生徒も見られます。そうした生徒を、変化の大きいこの社会で活躍できる実践的人材に育てるためには、自分でも気付かない力や魅力を、部活動や学校行事、そして学習活動で発見させ、自己肯定感を高める必要があります。本校におい

ては、強制的な学習活動も教育テーマである『未見の我の発見』を実現する場の1つなのです」（塩冶校長）

成績不振者に補習参加を義務付けると、ほとんどの生徒が「部活動があるから参加したくない」などと抵抗を示す。その原因は、高校入学までに学習面で手を掛けられる経験が少なかったからではないかと塩冶校長は考える。だからこそ、教師が根気強く参加を勧め、「やれば出来る」体験を味わわせると、「勉強が意外に楽しいことが分かった」という言葉が生徒の口から出てくる程、生徒は大きく変化する。

### 国・数・英の3教科の 基礎固めにこだわる

取り組みの内容を具体的に見ていこう。同校の「基礎力養成」は、1・2年生を対象に「基礎力診断システム」という基礎・基本を養成する講座として実施されている。講座の基盤になっているのが、年間4回実施されるベネッセの「基礎力診断テスト」(\*1)だ。「基礎力診断テスト」では、生徒の学力は学習到達ゾーン(GTZ)としてA1からD3までの12段階で評価される。同校では、D3の評価となった生徒に対して、

\*1 ベネッセの『進路マップ』の教材の1つで、GTZ(学習到達ゾーン)という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度を測るテスト。



松江西高校 校長  
**塩治 静雄** えんや・しずお  
教職歴37年。同校に赴任して38年目。「想い続け、挑み続け、諦めなければ、いつかはいつかきつと来る」



松江西高校  
**田中敏彦** たなか・としひこ  
教職歴34年。同校に赴任して35年目。国語科主任。「何事も生徒の目線で考えることを心掛けている」



松江西高校  
**松浦生士** まつうら・せいじ  
教職歴9年。同校に赴任して10年目。進路・教務担当。「生徒勉強、一生青春、いつまでも心柔らかに」



松江西高校  
**角田大地** つのだ・だいち  
教職歴3年。同校に赴任して4年目。進路・教務担当。「常に先を見据えて今できることを考えたい」

### 松江西高校

「真に社会に役立つ実践的人材の育成」を建学の精神とする。「普通科」(特進・総合の2コース)と「総合ビジネス科」(情報・会計・ビジネスの3系列)を設ける。大学・短大への進学が約7%、専門学校への進学が約45%、就職が約45%。

◎設立 1924 (大正13)年  
◎形態 全日制/普通科・総合ビジネス科/共学  
◎生徒数 1学年約160人(総数493人)  
◎2014年度入試合格実績(現役のみ)  
国公立大は、島根大、高知大、島根県立大に合格。私立大は、神奈川大、大阪成蹊大などに合格。

◎URL <http://www.matsuenishi-h.ed.jp/>

次の基礎力診断テストの2週間前から、専用テキストを用いた国語、数学、英語の補習への参加を義務付けている。

補習の時間は毎日放課後の50分間。少人数で一人ひとりが分かるまで教えられるので、ほとんどの生徒がここで達成感を得ることが出来る。と進路・教務担当の松浦生士先生は説明する。

「実際、補習に参加した多くの生徒が次の基礎力診断テストでD3ゾーンを抜け出します。『自分もやれば意外に出来るんですね』といった声をよく聞きます」

「基礎力養成」の取り組みでユニークなのは、年度やテスト回によって、補習の強制参加対象者を微妙に変化させている点だ。

「D3の生徒が全員参加なのは変わりませんが、対象をそれだけとせず、2週間の補習のうち、最後の3日間は全ての生徒を強制参加としたこともありますし、上位の生徒に補習を行ったこともあります。その狙いは、私たち教師が、授業とは異

なる学習の場に立ち会うことで、自校には多様な生徒がいるのだということ深く理解するためです。3教科以外の先生が、上位層の生徒の補習の講師を行ったこともあります」(松浦先生)

また、同校では、1年生1学期は学び直しの期間と捉え、ベネッセの「マナトレ」(\*2)を活用し、中学校までの国語・数学・英語の復習を徹底している。以前は1学期の中間考査までを学び直しの期間としていたが、更に十分な時間を掛けた方がよいと判断した。

簡単な問題から取り組んで達成感を味わいながら基礎を固めることで、生徒は2学期以降、円滑に高校の学習内容に入ることが出来る。と国語科主任の田中敏彦先生は言う。

「これまで全く国語の学力を身に付けてこなかった生徒が、高校の学習領域のテストで高得点を収め、我々を驚かせることもあります。客観的に見れば『マナトレ』の内容は平易ですので、それだけで学力が大きく向上するものではないでしょ

う。しかし、学力を『学びに取り組める力』とするならば、学び直しには確かな成果があると思います」

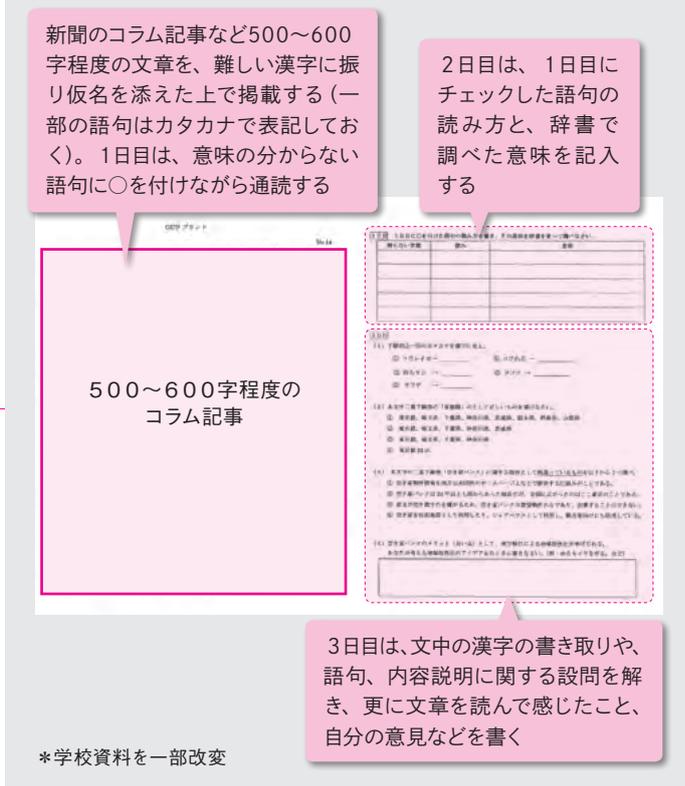
### 言葉の力を3日間1サイクルで高め、内発的学習を促す

基礎学力の育成を補完する形で取り組んでいるのが「語彙力養成」だ。授業内容を理解するためには語彙力が必要であり、言葉の力を高めることが、基礎の確立に大きく寄与すると考えたからだ。また、ほとんどの生徒は、推薦・AO入試、就職試験で面接を受け、志望理由書や履歴書の作成が必要になる。語彙・読解力を養成する学習を取り入れることは、希望進路の実現の面でもプラスになると判断したのだ。

同校では、全生徒が週3日、朝学習の10分間を使って、学校独自の語彙力アッププリント(GUPプリント)に取り組む。GUPプリントには新聞コラムなどの短い文章が1つ載っており、1枚のプリントに3日間掛けて取り組む構成となっている(P.18図1)。そこにも生徒の自己

\*2 ベネッセの『進路マップ』の教材の1つ。小・中学校範囲の学び直し専用のシステム教材。

図1 語彙力アッププリント (GUPプリント) の構成



肯定感を育むための配慮があると進路・教務担当の角田大地先生は説明する。

「1日目に通読し、2日目に分からない語句の意味を調べ、3日目には漢字や語句、内容説明に関する設問に答え、意見や感想を書きます。じっくりと時間を掛けて読み、少しずつ設問に取り組むことで、時事的な話題を読んだり、意見を書いたりすることへの抵抗感が減ることを期待しています」

2日目の語句の意味を調べる時には、全員紙の辞書を使うことにこだわった。ページをめくり、実際に調べた語句の箇所にマーカーを入れることを通して、学習に取り組んでいるという実感を持たせることを大切にしていたからだ。

入学当初は、意見・感想欄を未記入のまま提出する生徒もいたが、3か月間程朝学習を続けたところ、そうした生徒は減少し、全体的に記述する文章量も増えていった。ま

た、以前より格段に速く、文章を読んだり、分からない語句の意味を辞書で調べたりすることが出来るようになり、3日間で取り組むところを1日で終わらせる生徒も出てきた。

「生徒の様子を見ると、他教科の授業でも未知の言葉に出合った時に辞書を引くなど、分からないことをそのままにせずに調べる習慣が身に付いているようです。また、生徒同士でお互いの辞書の内容を比較するなど、言葉の意味にこだわる姿も見られるようになりました。年1回、全員受験する『語彙・読解力検定』(※3)も、学習に取り組む上での良い目標になっています」(角田先生)

### 自己肯定感の高まりを待つ 根気強さが教師には必要

「基礎力養成」「学び直し」「語彙力養成」の3本柱で生徒の基礎を厚く固めようとする同校だが、自己肯定感の醸成と、それを土台にした主体的な学習の実現は簡単なものではないと塩治校長は語る。

「例えば、『基礎力診断テスト』の結果で補習参加を義務付けられた生徒は、確かに次のテストに向けて、

教師に支えられながらも学習に一生懸命取り組み、そして成果を出します。しかし、それで安心して教師の手を離れてしまうと、学習習慣の確立までには至っていないため、次のテストでは再び成績が下がってしまうのです」

全体的には、GTZでD3ゾーンにとどまる生徒は減っており、確かな成果は得られている。また、「基礎力診断テスト」や「マナトレ」に取り組む中で自己肯定感を高め、更に同校が「ジョブカフェしまね」の協力で実施するキャリア教育(※4)を通じて、「将来のために今学びが必要だ」と気付き、主体的な学習に取り組む「軸」を確立する生徒もいる(図2)。だが、全ての生徒が教師の工夫に即座に反応し、学習や生活の習慣が変化するわけではない。

「だからこそ、今度はどの生徒が変化するだろうかと期待しながら、生徒の成長を待つ根気強さが私たち教師には必要なのだと思うのです。学習面で手を掛けてもらった経験が少ない生徒が自己肯定感を高めていくのは、一朝一夕に出来ることではありません。教師がじっくりと見守

※3 朝日新聞とベネッセが共同開発した「ことばの力」を問う検定。

※4 島根県のハローワーク「ジョブカフェしまね」が開発した3年間のキャリア教育プログラム事業に協力。事業終了後も同校で継続実施している。

る中で、焦らず、小さな成功体験を積み重ねていってほしいと思うのです」（塩冶校長）

生徒が変わっていく時期は、本当に様々で、しかも突然だと田中先生も語る。

「つい先日、ある2年生の男子生徒が突然私に『先生、僕は目覚めました。〇〇学を勉強するために大学に行きたいです。だから、もっと勉強します』と自ら宣言しに来ました。どちらかといえばおとなしい性格の生徒だったので、少々驚きました。また、少しやんちゃな生徒が『自分が変わりました。〇〇の仕事を目指して頑張ります』と言いに来たこともあります。その生徒は、『基礎力診断テスト』の補習対象になることが多く、勉強も渋々やっていると、いつか度を見せました。何かのきっかけがあって大きく変化したのでしよう。教師としてやはり素直に感動しました。そして、そのような出来事がある度に、中学校時代にどれだけ苦労した生徒でも、私たち高校教師は『この生徒は駄目だ』な

どと決めつけてはいけないのだと、生徒たちに教わる気持ちです」

### 生徒の中の「軸」の芽生えを察知したい

外発的動機付けから内発的動機付けへと移行し、自ら学び始めた生徒は、周囲に対する感謝の気持ちを述べるようになる」と松浦先生は感じている。

「家族や先生、友だちのおかげで変わることが出来たと話してくれた生徒がいました。入学当初は学校に通うだけで精いっぱいだったその生徒の3年間を振り返ると、自己肯定感が高まり、自分自身を受け入れることが出来たことで、ようやく周囲に対して目が向くようになったのだと思います。自分の存在に自信を持つためにも、高校生にとって基礎学力の定着は重要だと思います」

生徒の言葉に耳を傾ければ、学びの「軸」が芽生えていることも感じ取れると角田先生は考える。

「普段の勉強は嫌いだけれど、GUPプリントは好き」と言い、自発

的に過去のプ

リントに取り

組む生徒もい

ます。社会の

ことに興味があ

って、自分の

考えを書く

ことが楽しい

のであれば、

それはすなわ

ち勉強が楽し

しいというこ

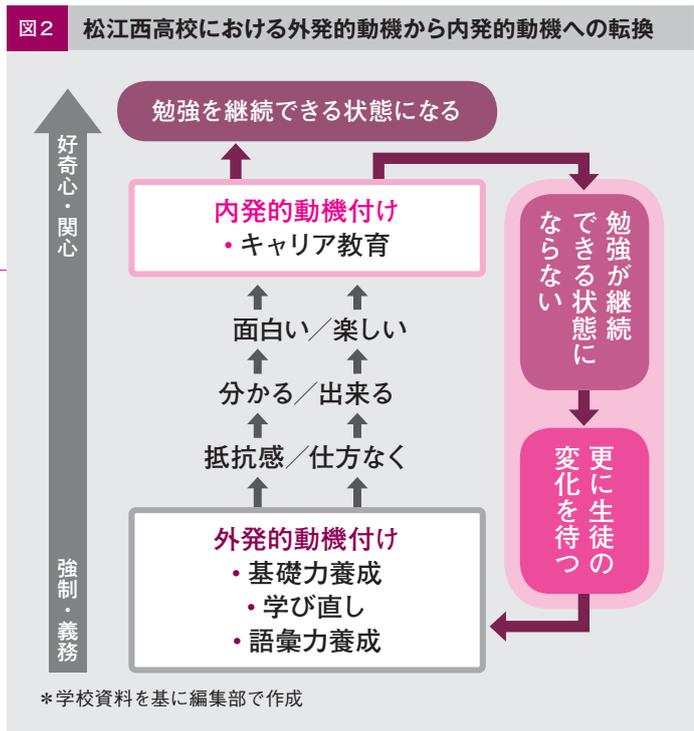
となのではな

いかと、その

生徒の顔を見

勉強が継続  
できる状態に  
ならない

更に生徒の  
変化を待つ



す。きっとその生徒には、社会に出てからも学び続けられる『軸』が出来つつあるのかもしれない」（角田先生）

生徒は教師が思いを込めて指導すれば、いつか必ず伸びると塩冶校長は断言する。

「高校時代に1つでも多くの成功体験を積みませ、それを礎にすることで、変化の大きい社会においても学

び続けられる生徒を育てたいのです。そのためには私たち教師には、生徒が生き生きと学べる授業スタイルや教材を絶えず研究することが求められます。目の前の生徒を丁寧にしながら、紙の辞書にこだわる一方で、アクティブラーニングを導入するなど、この学校に合った不易と流行を考えていきたいですね」（塩冶校長）

## 「論理性」を重視した現代文指導で

# 次代を生き抜くたくましい「軸」を育む

教科学習に取り組み上で、「このように勉強すればよい」という学習方略が打ち出せることは、生徒にとって大きな学びのモチベーションになる。済々黌高校3学年国語科が生徒に徹底する「論理的思考」は、学習の見通しを生徒に提供するだけでなく、変化の大きな社会の中でも常に論理的に考え、進むべき進路を選択できる素地を養う。

### 現代文の学習方略を 論理性の中に見いだす

済々黌高校の3学年国語科では、現3年生が入学して以来、論理性に重きを置いた現代文の読解、記述指導を展開している。中学校で学力上位層だった生徒が入学する同校でも、多くの生徒にとって現代文は「何をどう勉強すればよいか分からない教科」だと、益田啓史先生は論理性重視の指導の背景を説明する。

「私は、国語には『芸術としての文学的側面』と『論理的側面』の二面性があると考えています。多く

の生徒、そして教師も、その文学性に目を向けがちなため、学習方略がなかなか見つけれず、生徒からは『どう勉強すればよいか分からない』といった声が上がってしまうのです。文学的な面白さは十分に伝えながらも、『国語はこう勉強するべきだ』という学習方略が見いだせるように、論理性を重視する指導を徹底してきました」

現代文の授業で扱う素材文は、中学校までと比べて文章の内容が格段に難しくなる。それまでは感覚で正解を導いていた生徒が、「本文の内容が理解できない」「設問文の意味

がつかめない」といった状態に陥ることもある。そんな時「読書量が足りないから分からないのだ」といった言葉で生徒を突き放したくなかったと、橋本淳先生は語る。

「他の教科の学習でも頑張り、更に部活動にも没頭している多忙な生徒に『読書を通して読解力を身に付けなさい』と言うのは酷な話です。国語が教科である以上は科学的でなければならぬし、大学入試で課されているのであれば、そこで求められる論理的な読解力、記述力を授業の中で養うのは私たちの責任だと思います」

### 新入生向け宿泊研修で 国語学習の取り組み方を修正

論理性を重視する指導は、入学後すぐに行われる宿泊研修でスタートした。そこで生徒たちに「国語は論理だ」「数学と同じように、論理的に考えるプロセスがあれば必ず正確な読解や答案にたどり着く」と、これまでの学習観の修正と高校3年間での新しい学習観の確立を迫った。

「生徒の反応は『国語がそういう教科だとは考えたことがなかった』というものでした。『これまでの授業では、なぜそう考えるのかと聞か

熊本県立済々黌高校

益田啓史 ますだ・ひろし

教職歴24年。同校に赴任して4年目。国語科。3学年担任。「有遠慮」

熊本県立済々黌高校

國生麻衣子 こくしょうまいこ

教職歴13年。同校に赴任して6年目。国語科。3学年副担任。「日々勉強」

熊本県立済々黌高校

橋本 淳 はしもと・じゅん

教職歴10年。同校に赴任して2年目。国語科。3学年担任。「過猶不及」

## 熊本県立済々黌高校

◎正倫理明大義（倫理を正しうし大義を明らかにす）、重廉恥振元氣（廉恥を重んじ元氣を振るう）、磨知識進文明（知識を磨き文明を進む）の三綱領を建学の精神とする。「文武両道」を標榜し、部活動加入率は9割を超える。スーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校。

◎設立 1879（明治12）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約410人

◎2014年度入試合格実績（現浪計）

国公立大は、京都大、大阪大、九州大、熊本大などに329人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ474人が合格。

◎URL <http://seisekkoed.jp/>

れることもほとんどなかった」という声もありました。そうした生徒に、本文の正確な読解と論理的思考があれば現代文の成績は上がることを理解させ、学びの意欲を高めることも目的でした」（益田先生）

現3年生が参加した宿泊研修では、中学校で学習した太宰治の『走れメロス』を教材に、実際に設問に取り組みながら論理的な思考の大切さを指導した。例えば、「次の文を読んで後の問いに答えよ」と設問で指示されているのにもかかわらず、文章の内容を逸脱して自分の経験や感情などを持ち込んで答える生徒が少なくなかったという。

「そうした解答を例に、『これは、私はこう思うという感覚に頼って答えを導いている』と説明しました。もちろん、感覚による解答が間違っていない時もありますが、それは偶然にすぎません。文章に書いてあることだけを根拠に全ての受験生が公平に解答できるように問題が作られているのが大学入試の現代文なのだ」と話し、また、それが言葉の正しい

運用能力となり、考え方や生き方にも影響を与えることを訴えて、学習観の転換を求めました」（益田先生）

## 単元に入る前に

## 読解内容を問う設問を作成

日々の授業で心掛けていることは、思考のプロセスを省略しないことだ。まず教師が「こう思う」といった主観での説明を避け、「本文にこう書いてあるから、こうした解答にしなければいけない」といった客観的な説明をするように配慮している。そのためには、素材文のどの部分について生徒に考えさせるか、入念な教材研究が当然欠かせない。そこで3学年国語科では、1年次より毎回新しい単元に入る前に、「この素材文では、授業で生徒に何を考えさせるのか」を設問としてまとめ、共有している（P.22図1）。

「新しい単元に入る1週間程前から、どういう設問を作ればその素材文を生徒が論理的に読解したかを確かめられるか検討を始めます。そこで作った設問は、そのまま授業プリン

トで活用され、更に定期考査の問題骨子にもなります」（益田先生）

設問の難易度はセンター試験の設問を記述問題にするようなレベルだ。単元ごとに担当教師が作問し、夏目漱石の『こころ』では、50字から120字程度で答える設問が30問程作られた。論理的な読解を確認できる設問になっているかを確認するために、お互いに解答例を作ってみることも多いという。設問と解答例を共有した上で授業に臨むので、授業の根幹は学年内でぶれることがないと、國生麻衣子先生は言う。

「生徒に『実は、この設問は私と益田先生とで解答が違ったんだよ』と紹介し、どちらがより論理的で納得できる解答かを、考えてもらうこともあります。先生たちも一生懸命論理的な解答を作っているから、君たちも論理性にこだわってほしいというメッセージでもあります」

苦勞しているのは定期考査の作問だと橋本先生が明かす。

「素材文の内容理解を見る設問が厳選されているのであれば、それは

当然定期考査の問題として出題するべきです。また、授業で学んだことが定期考査で出題されなければ、生徒の授業に対する信頼感にも影響するでしょう。とはいえ、定期考査で出す問題を授業で扱うことに当初は抵抗があったのも事実です。ですから、授業中に取り組んだ問題とは出題形式を変えるなどの工夫はしています。ただし、必ず授業で学習した考え方、論理性で解ける問題になるようにしています」

## 自分の答えに こだわり始めた生徒たち

生徒の読み方や解答内容が変わってきたのは1学年の終盤だった。

「定期考査の前に、『授業プリントの自分の解答が合っているか見てほしい』と生徒が現代文の質問に来るようになったのです。古文や漢文ならともかく、現代文で生徒が何人も質問に来るといのは初めての経験でした。もちろん、授業の内容が確実に定期考査に出ることが、質問に来る1つの理由だとは思いますが、自分の解答と教師の解答のどこが違うのかを確認して、自分の解答を練

り上げたいという、理解へのこだわりを感じました」(國生先生)

生徒にとって、現代文が自分で学習できる教科、やれば分かる教科になってきたことを、國生先生は生徒の授業態度からも感じている。

「『ここが根拠だから、こういう答えになるよね』と説明した時に、『確かにそうだ』としっかりうなずく生徒が明らかに増えました。また、授業プリントなどで書き直しを求められた際も、以前はどう書き直せばよいか途方に暮れる生徒がいました。が、今の学年は皆、根気強く自分の力で取り組んでいます。実際、生徒の記述力は高いと思います」

教師自身が以前よりも自信を持って授業をしていると、益田先生は率直に語る。

「私自身、以前は論理性をあまり意識せずに説明していました。今と比べれば、自分の説明に確固たる自信がなかったですし、正直、1コマ1コマの授業で生徒に何を獲得させたのか、明確に説明できなかったと思います。しかし今は、生徒に『今日は、こういう論理構成を理解してほしい』と自信を持って授業をして

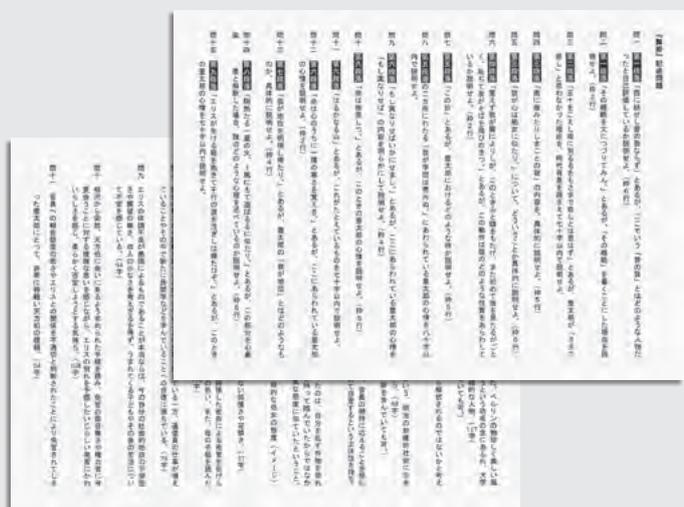
います。だから生徒も、私たちに對して自分の意見をぶつけてみる価値があると思ってくれているのではないのでしょうか」

論理的に考え抜くために、2年次では、生徒が自分の解答を自分で添削する形式も取り入れた(図2)。

「生徒の希望に基づいて難度の異なる課題を月に1回程度出しました。学力に応じた課題を出すことで、やりがいを感じられるようにしたかったからです。この時、解説も一緒に渡し、生徒には自分の解答を自分自身で添削した上で提出させました。私たちは、生徒の添削を見て、本文の重要箇所をラインを引いているか、説明が不十分な部分はないかなどを更に添削します」(益田先生)

「添削課題でも安易に納得しない

図1 済々黌高校3学年国語科 読解内容を問う設問と解答例



新しい単元に入る1週間前、3学年の国語科教師が集まり、論理的な読解が出来るかどうかを問う設問と解答例を作成し、共有する。

\*学校資料をそのまま掲載

生徒が増えた」と國生先生は話す。「わざわざ職員室に来て、『先生の添削のこの部分には私は納得が出来ない。私は自分の解答の方がより良いと思う』と議論を仕掛けてくる生徒が増えました。そうした姿を見ると、これこそが自分たちが国語を通じて育てたかった生徒なのだと思えます」(國生先生)

「最近、授業でこちらが間違った時は、ここぞとばかりに攻めてくる

のです。先日私が間違いに気付  
き、訂正していると、『もっと良い  
解答があるはずですよ』と生徒が言い  
始めました。結局、50分間をその解  
答についての議論に使ってしまいま  
したが、もちろん決して嫌な気分分  
ではありません。ワイワイと意見を言  
い合う中で、一人ひとりの思考が整  
理されていったのだと思います。そ  
ういう時間もたまにはあってよい  
と感じました」（橋本先生）

### 入試学力を高めながら 国際社会を生きる力を養う

3年間の指導で、新しい課題も見  
えてきた。その1つが、論理的思考  
力を定着させる教材の開発だ。

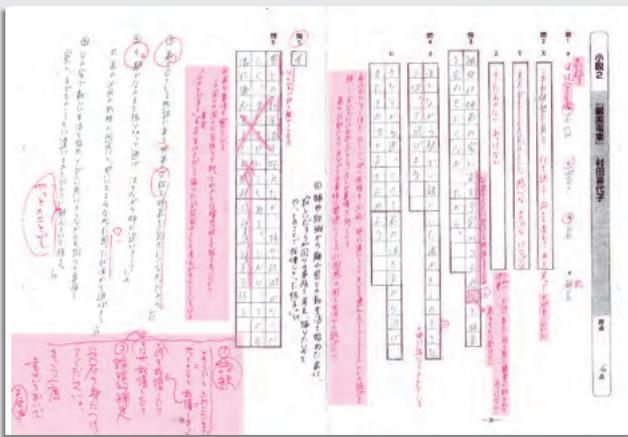
「同じ考え方で解ける問題を、素  
材文を変えながらいくつも繰り返す  
ことで、論理的な読み方や書き方を  
定着させるのが理想です。従来の現  
代文の指導には似つかわしくないで  
しょうが、同じ型の思考で反復練習  
が出来るような教材を開発したいで  
すね。同じ論理で答えられる設問を  
作ることで出来る複数の素材文を探

すのは大変ですが、いつか挑戦して  
みたいですよ」（益田先生）

橋本先生も反復練習の大切さに同  
意する。

「現代文が苦手という生徒が反復  
練習をすることによって、『こうやっ  
て解けばよいのだな』と論理的な思  
考の型に気が付くことには、単なる  
受験テクニックの習得といった領域  
にとどまらない普遍性があります」

図2 済々黌高校3学年国語科 生徒が自分の解答を添削



生徒が解説を見ながら自分の解答を添削し、その添削内容を教師が更に添削する（網掛け部分が教師の添削）。2年次に月に1回程度実施。

\*学校資料を一部改変して掲載

\*出典／『現代文読解問題 基礎編』（駿台文庫）

半面、入試で求められる力の汎用  
性をもっと大切に考えたいと益田先  
生は話す。

「例えば、東京大の個別学力試験  
で求められる学力を、『難解な入試  
問題を解くためだけに必要なもの』  
と考える教師はいないでしょう。入  
試で求められる学力は、人生の選択  
の場面で必要な論理的に考える力に  
通じるものであり、そうした力があ

あってこそ、時にはあ  
えて大胆に感情を優先  
する決断も出来るので  
す。生き方や働き方に  
も大きな影響を与え得  
る論理的思考力を、入  
試対策を通して身に付  
けさせていると強く自  
覚しています」

同校はスーパーグ  
ローバルハイスクー  
ル（SGH）指定校で  
あり、「国際的素養を  
備え世界をリードする  
済々多士教育プログラ  
ムの開発」を進める。

国際社会を生きる素養として論理  
的・批判的思考力の育成も掲げてお  
り、国語科に対する期待も大きい。

「論理性が身に付くことで、他者  
に向き合う寛容度は高まります。正  
解が1つではない社会だからこそ、  
その時点での自分の答えにこだわ  
り、考え抜く力を授業で身に付けて  
ほしいと考えています」（橋本先生）  
変化の大きな次代を乗り切るため  
に、論理的に答えを出すことにこだ  
わる力の育成に取り組む同校。その  
身近な成果は、生徒が教師の言動に  
ますます理屈で食い下がるように  
なった点だと益田先生はほほ笑む。  
「我々の生活上の指導に対して、  
ある生徒が『先生方の発言には矛盾  
がある』と痛烈に批判を展開したこ  
とがありました。しかし、その言葉  
の直後、『ただ、10代の僕らには、  
理不尽さを体験することも必要だか  
ら受け入れようと思います』と言っ  
たのです。大人を恐れず、思い通り  
にならないことがたくさんある人生  
を、論理という武器を持って生きよ  
うとする頼もしさを感じました」

# 新課程入試の出題予測と 入試直前期の指導

年が明ければ入試本番直前となり、生徒も教師もいよいよ正念場を迎える。  
そこで、新課程に対応した入試となる  
数学、物理、化学、生物の各教科・科目担当教師に、  
センター試験や個別学力試験でどのような出題を予測しているのか、  
また、それに基づいて、入試直前期にどのような指導を行おうとしているのかを聞いた。

## 数学

新たに加わった分野を中心に  
演習を積みませ、入試対応力を付ける

茨城県立下妻第一高校

飯泉雅明

センター試験で出題内容が  
大きく変わる「数学Ⅰ・A」に注意

本校では、数学の学習内容の増

加に対して進度を確保するために、  
分野によって軽重をつけながら授  
業を進める一方、課外授業や週末  
課題を充実させて生徒の学習時間  
を確保し、章末テストで細かく理  
解度を確認しながら、授業内容の  
定着を図ってきました。「数学Ⅲ」  
も10月上旬には教科書の内容を終  
え、今は演習を行っています。

センター試験ですが、「数学Ⅰ・  
A」は、「データの分析」と「整数  
の性質」が新たな分野として加わ  
り、出題内容も大きく変わると思  
われます。まず、「数学Ⅰ」の「デー  
タの分析」は、必答の小問として  
の出題が予想されます。そのため、  
生徒はこの分野に不安を感じてお



茨城県立下妻第一高校  
飯泉雅明  
教職歴25年。同校に赴任して10年  
目。進路指導部 数学科。

◎創立117年の伝統校。国際社会に貢献でき  
る人材の育成を目指し、「世界に輝け 為校学園  
『光』プロジェクト」を展開。◎全日制/普通科  
/共学/1学年約280人◎2014年度入試合  
格実績(現浪計) / 国公立大は、東北大、筑波大、  
茨城大、京都大などに128人が合格。私立大は、  
慶應義塾大、早稲田大などに延べ606人が合格。

り、課外授業の「データの分析」  
の回では、参加者が普段よりも20  
人程多くなります。生徒は、公式  
に単純に当てはめるだけの問題は  
解けるのですが、少しでもひねら  
れると途端に解けなくなります。  
また、共分散の計算なども苦手で  
す。そこで授業でも、演習を他分  
野以上に行うようにしています。

「数学A」の「整数の性質」は選  
択問題にすると、大学入試センター  
から発表されました。そして、「数

学A」の3項目の内容のうち、2項目以上を学習した者に対応した出題」とあることから、恐らく「数学A」の3つの分野から大問が各1問出題され、うち2問を選ぶことになるでしょう。本校では、「場合の数と確率」を必須とし、もう1つは自分の得意・不得意に応じて選択するように指導しています。ただ、「図形の性質」は、前の設問が解けないと、その後の設問も解けないケースが比較的多くあります。生徒にはそのリスクを説明し、よく考えて選ぶようにと伝えていきます。「整数の性質」は、個別学力試験でも出題されやすい難関大志望者が選ぶ傾向にあるようです。

「数学Ⅱ・B」は、新課程で大きな改訂がないため、例年通りの出題内容になると思います。ただ、過去2年間出題のない「三角関数」は出題の可能性が十分あることを生徒にも伝えていきます。難易度は、新課程入試初年度だからといって、易しくはならないと考えています。2013年度入試と14年度入試との中間の難易度と予測し、生徒には楽観視しないように伝えました。

気になるのは、センター試験の試作問題で、問題文を読み込まないと正答するのが難しい問題が見られたことです。数学においても読解力が求められていることを感じました。センター試験では制限時間内に多くの問題を解く処理能力も求められます。本校の難関大理系志望者でも、「数学Ⅰ・A」の予想問題でまだ満点を取れていません。出題形式や時間配分に慣れるよう、センター試験形式の演習に何度も取り組ませています。

### 直前でも基礎に戻ることがもう5点、10点につながる

12月からは、課外授業で志望大別対策講座を開こうと考えています。主に難関大理系志望者を対象にした課外と、数学が苦手な生徒を対象とした基礎・基本を中心に指導する課外です。冬休みにも同様の講座を行い、生徒の習熟度に応じた指導をする予定です。

たとえ1月であっても、苦手分野があれば、教科書の説明や例題を理解しているか、基礎・基本に立ち返って学習するように指導し

ます。直前期だからこそ基礎・基本を見直すことがもう5点、10点につながる方法だと考えています。なお、個別学力試験で「数学Ⅲ」が課される生徒には、センター試験対策の合間に「数学Ⅲ」の問題も解くように伝えていきます。

### 新旧課程の共通範囲を重点的に

センター試験後は、個別学力試験に向け、各自、志望校の過去問題を解き、自己採点をして、不明な点などを教師に質問する個別指導が中心となります。「数学Ⅲ」については、センター試験対策の間、少し離れることになるので、教科書の全例題を解き直す総復習を3日間行つてから演習に入ります。

理系の個別学力試験で注目されるのは、「数学Ⅲ」の「複素数平面」の扱いです。大学側としては出題したい分野の1つだと思えますが、15年度入試は旧課程生も受験するため、「複素数平面」の本格的な出題は来年度になると考えられます。したがって、「数学Ⅲ」は「微分法」や「積分法」など、旧課程と

の共通範囲に重点を置いて、演習を積ませる予定です。それに加えて、頻出の「ベクトル」と「数列」の対策も漏らさず行うよう指導します。もちろん、「複素数平面」の出題の可能性はゼロではないので、直前期には、生徒に教科書の章末問題と傍用問題集を解き直すよう指導する予定です。

文系の個別学力試験対策では、「微分法」「積分法」「数列」「ベクトル」、難関大志望者にはそれに加えて「整数の性質」を中心に演習を積ませます。「整数の性質」はこれまで一部の難関大で出題されていましたが、新課程で分野として確立したため、どの大学でも出題される可能性があります。個数の処理と絡めた問題や、与えられた式がある数の倍数であることを証明するような問題は、難関大以外でも出題されるのではないかと予想しています。また、多くの生徒が苦手としている、ユークリッドの互除法を利用して整数の組を1つ見付ける問題なども狙われやすいので、解けるようにさせておきたいところです。

\*この記事は、2014年10月に行ったインタビューを基に作成しています。

# 必修修分野の「原子」は 出題される前提で対策を立てる

長崎県立諫早高校 後田康蔵

特定の分野に偏らず  
満遍なく対策を



長崎県立諫早高校  
後田康蔵  
うしろだ かつこうぞう  
教職歴18年。同校に赴任して3年  
目。物理担当。

○創立103年の伝統校。校訓は「自立創造。2010年度に中学校を併設し、併設型中高一貫教育を行う。○全日制・定時制／普通科・理数科／共学／1学年約280人○2014年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、京都大、大阪大、九州大などに227人が合格。私立大は、同志社大、立命館大などに延べ133人が合格。

新課程の「物理」の学習内容が旧課程の「物理Ⅰ」に比べて約2倍に増えているので、それに応じてセンター試験の「物理」の内容も大きく変わると考えられます。生徒の理解度を測るために、広い学習範囲から満遍なく、旧課程の1つ前の「物理ⅠB」の時によく出題されたような、各分野の典型的な問題が多くなると推測されます。そのため、「物理ⅠB」の過去問題などを通して各分野の典型問題に慣れさせることで、生徒は得点しやすくなるはずです。ただ、新課程では探究が重視されているため、考察力が必要な実験問題の出題も十分考えられます。それがどの分野になるかは予測できず、

全ての分野をしっかりと理解しておく必要があります。問題構成では、小問の総数は従来とほぼ同じだとしても、大問数は従来より1つ増えて5つになるかもしれません。大問数の変化は、出題のされ方に大きく影響します。例えば、新たに加わった「原子」の分野は、大問数が変わらなければ、小問でしか問われないと思います。しかし、大問数が増えるとすれば、「原子」に特化した大問が

作られることもあり得るでしょう。また、大学入試センターが「一部に選択問題を配置する」と発表しているため、履修が遅くなる「原子」は大問で出題される場合、選択問題となる可能性があります。

一方、国公立大の個別学力試験の内容は、あまり変わらないと思います。ただ、「原子」からの出題はどの大学でも十分に考えられますから、出題を前提にして対策を立てておくことが大切です。特に、以前から「原子」に関連する出題をしていた大学や、素粒子の研究に実績がある大学などでは、より狙われやすくなるでしょう。難度の高い実験問題で問われても、不思議ではありません。出題形式としては、これまでの各大学の傾向を踏襲すれば、「力学」「電磁気」に加えて、「波動」「熱」「原子」から1問ないしは2問を出題するイメージですが、この傾向も大きく変わるかもしれません。また、「電磁気」や「波動」などに「原子」の内容を絡めるなどの融合型問題が出題される可能性もあると思います。

## 直前期に教科書を再読させ 本質的な理解を深めさせる

本校の物理の指導では、教科書を進めている時には柱となる事項を押さえさせ、教科書の内容をひと通り終えてから演習を通して細部への理解を深めさせています。上位クラスでは、教科書の内容を終えた9月下旬以降、図解を要する問題など、物理独特の考え方を必要な問題を、「原子」を含むあらゆる分野から集め、生徒に取り組ませました。

多くの生徒が理解に苦労していたのは、文字を扱う問題において、その文字が変数か定数か、正か負かを判断しなければならぬような問題への対応でした。そうした問題は、難関国公立大の個別学力試験では分野にかかわらず出題される可能性がありますから、継続して指導するつもりです。また、10月の進研記述模試では、制限時間内に全問を解き終えられなかった生徒が目立ちました。その要因に考えられるのは、1つめは理解不足で、特に2年生の1、2

学期に学習した「力学」の内容を多くの生徒が忘れていました。2つめは、計算が遅いなど技術的なことです。いずれも、演習量を積み重ねて克服できると考えています。

直前期には、教科書を読ませることも重視します。演習でつまづいたところは、必ず教科書の例題などに戻り、基礎から確認するように指導します。物理の教科書には難解な記述が多く、内容をしっかりと理解するためには、ある程度の演習量をこなしてから読むことが大切です。そうすることで、最初に読んだ時には十分に理解できなかったグラフや図の意味などが分かるようになり、物理に対する本質的な理解を深めることにもつながると考えています。

**段階的演習により、様々な問題への対応力を付ける**

12月からはセンター試験対策に入れます。「物理IB」時代を含む、過去問題から良問を抜粋して復習させ、その後、大問構成や出題傾向が異なる問題を60分間分選び、それらを生徒に解かせます。

典型的な問題や考察力の必要な問題、「原子」の大問など、本番で出題されそうな様々な問題・形式に対応できるようにします。直前期には、時間的な負担を変えながら対応力を養います。自己採点后、疑問があれば、教科書で確認した上で質問にくるように指導します。

センター試験後は、国公立大の個別学力試験に向け、東京大・京都大、旧帝大、広島大、長崎大・熊本大と、志望別にクラスを編成します。どのクラスでも、各大学で以前から頻出の分野の他、「原子」の問題にも取り組ませる予定です。

個別学力試験の出題傾向は従来通りだと考えられるため、教材には過去問題を用いますが、生徒には2015年度入試では大問数が増える可能性があることを伝え、注意を呼び掛けるつもりです。個別学力試験の試験時間が例年より長くなっていけば、大問数が増えている可能性が高いと考えられますから、生徒には志望校の募集要項を選択問題の有無などの出題範囲と併せてしっかりと確認するように伝えるつもりです。

**化学**

**生徒の理解が特に不十分な部分を  
中心に演習を積みませる**

兵庫県立宝塚北高校 小宮山宏之

**選択問題の選定を想定し  
解答時間を5分短く設定**

本校の「化学」の指導では、3年

生2学期の期末考査前の11月下旬にセンター試験対策を本格化させます。授業中の演習では、過去問題から、新課程入試でも出題が予想される実験・観察の良問などを抜かし、生徒が1問解くごとに、選択肢の合理的な絞り方などを解説します。更に、その問題と関連する他分野についても併せて説明します。

冬休み中の補習では、1日1か年分のセンター試験の予想問題に、本番と同じ制限時間60分間で取り組ませます。小問の総数は従来とほぼ同じと考えられるので、問題を解きながら時間配分を身に付けさせるためです。ただ、全問を解き終える目安は、旧課程指導時よ



兵庫県立宝塚北高校 小宮山宏之  
こみやま ひろゆき  
教職歴20年。同校に赴任して3年目。化学担当。

◎校訓は「自律・協調・勤労・創造」。2014年度にグローバルサイエンス科を設置。◎全日制／普通科・演劇科・グローバルサイエンス科／共学  
／1学年約320人◎2014年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、京都大、大阪大、神戸大などに164人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ706人が合格。

りも5分短くし、45分間とするつもりです。というのは、「化学」でも、一部に選択問題が配置されると大入試センターから発表されており、選択問題の中でどの大問が自分にとって解きやすいのかを冷静に見極めるための時間を、見直しの時間と共に確保させるためです。もちろん、生徒にはその趣旨を説明し、精神面でも本番に近い形で演習が積めるようにしたいと考えています。

\*この記事は、2014年10月に行ったインタビューを基に作成しています。

選択問題には、新課程で新たに加わった「高分子化合物」の問題が含まれる可能性が高いと推測します。それは、教科書の最後に扱う内容であり、履修が遅くなるためです。「高分子化合物」に「有機化学」の内容を絡めた分野融合問題となることもあるでしょう。分野融合問題はセンター試験の試作問題にもありましたから、本番でも出題される可能性は十分あると考えています。

また、アモルファスや核酸の構造など、授業で「触れること」「扱うこと」と学習指導要領に明記されている内容は、知識理解を問う正誤判定問題などで出題されるのではないかと考えています。取りこぼしを防ぐために、センター試験直前期に生徒に改めて説明し、教科書やノートを見直すように指導する予定です。

## 苦手な生徒が多い有機化学、必修の高分子化合物に注力

国公立大の個別学力試験や私立大入試に向けては、センター試験後、東京大・京都大、旧帝大、地

方国公立大、私立大と、志望別にいくつかのグループに分け、1コマ80分間の対策講座を開きます。レベルに応じて、マルコフニコフ則やケト・エノール互変異性、ジステレオマーなど、教科書に記載されているながら授業で大きく扱わなかった発展的な内容を解説し、更に個別学力試験や難関大模試などの過去問題をアレンジした問題を教師がつくり、それを生徒に取り組ませる予定です。

個別学力試験の出題傾向は、新課程になって大きく変わるとは考えにくく、今年度もこれまでの類出の分野を中心に対策を行うつもりです。例えば、化学平衡や有機化合物の構造推定などは、15年度入試でも多くの大学で出題されるでしょう。そのような事項については、基礎から応用まで幅広い難度の問題に取り組ませるつもりです。取り上げた事項が出題されなかったとしても、将来、別の場面で役立つと考えています。

対策講座では、特に「有機化学」に力を入れます。それは、どの大学の入試でもよく出題されるのに

もかわらず、本校の生徒の多くが苦手としている分野だからです。「有機化学」は、旧課程では3年生の春頃までには授業での説明が終わっており、夏休みに重点的に復習させることが出来ていました。

しかし、今年は授業で扱うのが9月になってしまい、知識を定着させる時間が少なかったため、生徒は理解に不安を感じています。10月以降、補習などでも「有機化学」には重点を置いて指導してきましたが、対策講座でも特に多く演習

を積み重ねたいと考えています。

また、「高分子化合物」への指導も対策講座で重視します。旧課程では選択履修分野だったため、これまであまり出題されていませんでしたが、新課程では必修なので、どの大学で出題されてもおかしくありません。しかも、教科書の最後で扱う分野であり、生徒の理解が不十分であることが考えられます。直前期に過去問題をなるべく多く解かせたいと、今、「高分子化合物」の問題を収集しています。

## 生物

## 増加した学習内容に引きずられて指導が細かくなりすぎないように留意

石川県立金沢錦丘高校 にしきかみが 西川祥司

## 安易な易化予測はせず、しっかり対策を

大学入試センターが発表したセンター試験「生物」の試作問題は、知識理解を問う問題が中心で、本番の問題を考える手掛かりにはな

りにくいものでした。「生物」は主に理系の生徒が選択することを考えると、他教科と同程度の平均点を維持するために、旧課程の「生物I」より難しいのではないかと推測します。留意しなければいけない点は、難化した2014年度

入試のセンター試験「生物I」で、基本的な知識を理解した上で更に考察させるような問題が増えていたことです。新課程の趣旨は思考力・判断力・表現力などを高めることにありますから、「生物I」の出題傾向が、新課程入試の「生物」においても続くのではないかと考えるのが自然ではないでしょうか。

「生物」の大問数は「生物I」と同じ5問と予測しています。また、大学入試センターから「一部に選択問題を配置する」と発表されました。問題数や領域などには触れていませんが、「高校での進度に配慮した」という理由から考えると、あくまでも推測ですが、「生態と環境」や「生物の進化と系統」など教科書の後方にある分野が選択問題となる可能性があるでしょう。

「生物基礎」の大問数は、学習指導要領の指定範囲の「生物と遺伝子」「生物の体内環境の維持」「生物の多様性と生態系」から各1問、計3問と推測します。主に文系受験者が選択するので、あまり難しくなく、知識問題が中心かと思えます。ただ、基礎とはいえ思考力

や計算を要する問題も想定されます。文系受験者は計算が苦手な生徒が多いので、注意が必要です。

### 教科書を見比べ 指導に軽重をつける

本校の理系では教科書を全て終える10月上旬から演習を始めます。教科書を進めている間は、どうして進度優先となり、生徒の知識の定着度にはやや心配があります。しかし、教科書を終えずして演習には入れません。補強を要する箇所は演習時に補うこととして進め、10月に入るまでに教科書は完了と教師間で意思統一しています。

指導時に留意しているのは、「生物基礎」も「生物」も、教科書によって各分野の扱い方や登場する用語などにばらつきが見られることです。センター試験に限らず、入試では、使用する教科書の違いが試験を受ける上で有利・不利となるような問題にはしにくいと考えられます。教科書を見比べ、各社共通して詳しい部分は丁寧に教える、自校の教科書では記述が詳しくても、他社での扱いが軽ければあま

り時間を掛けない、更には、他社の教科書に出ていて、自校の教科書には記述がない箇所があれば、指導漏れがないようにするといった配慮をしています。

新しい用語や生物名が増えたのも新課程の特徴です。生徒はどこまで覚えればよいのか迷いがちなので、教師のある程度の提示が必要かと思えます。そのように、効率の良い学習を指導することは、センター試験理科2科目と負担が重くなった文系の生徒が、国公立大を諦めてしまわないようにするために重要だと感じています。

### 免疫やゲノムを中心にした 従来通りの演習を重ねる

入試直前期の指導は、旧課程に比べ学習内容が深くなり、他分野との融合問題としても出題されやすい「免疫」や「ゲノム」などを以前よりも丁寧に指導し、それ以外は必要以上に新課程を意識しすぎず、従来型の手法で仕上げてくださいたいと考えています。限られた直前期の時間で、増加した学習内容に対応するためには、全て教え



石川県立金沢錦丘高校 西川祥司 先生  
 教職歴28年。同校に赴任して11年。進路指導課主任。生物担当。

- 2013年度に創立50年を迎えた。2004年度に中学校を併設し、中高一貫教育を行う。
- 全日制/普通科/共学/1学年約310人
- 2014年度入試合格実績(現浪計)/国公立大は、北海道大、東北大、金沢大、大阪大などに50人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ470人が合格。

ようとせず、ある程度の取捨選択が必要だと思います。

中学校に移行した内容をどう扱うかも考えどころです。メンデルの法則などは教科書から説明がなくなりしましたが、それを理解していなければ分からない事項があります。結局、指導が必要ですし、そうした積み重ねが、生徒の重い負担になっていると感じます。

直前期でも基礎でつまづいている生徒には、問題文の重要箇所を線を引きながら、よく読むよう指導しています。知識があっても、問題文から出題意図を読み取れず、に解けない場合が多いからです。読解力はすぐには身に付かないので、入試直前まで演習を1つでも多く積み重ねることが重要です。

\*この記事は、2014年10月に行ったインタビューを基に作成しています。



北海道  
釧路江南高校

単位制高校の進路指導

生徒と徹底的にかかわる  
体系立った指導で  
主体的な進路意識を育む

◎1919年に北海道庁立釧路高等女学校として開校。48年に釧路市立女子高校と統合、50年に現校名に改称、男女共学となる。2005年、進学重視型単位制に移行した。校訓は「叡智・希望・慈愛」。「文武一道」を校是としており、部活動加入率は95%。

設立	1919(大正8)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約240人
2014年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、小樽商科大、北見工業大、北海道大、北海道教育大、弘前大、筑波大、千葉大、東京学芸大、鹿屋体育大、釧路公立大、名寄市立大、島根県立大などに延べ48人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、中央大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ265人が合格。
住所	〒085-0051 北海道釧路市光陽町24-17
電話	0154-22-7987
Web Site	<a href="http://www.k-konan.hokkaido-c.ed.jp">http://www.k-konan.hokkaido-c.ed.jp</a>

変革のステップ

背景

◎素直な半面、主体性に欠ける生徒の学力と進学実績の向上を目指して単位制を導入

STEP 1

実践

◎日常的な面談や「進路シラバス」の作成、2人担任制など、生徒に徹底的にかかわる指導を実践

STEP 2

成果

◎視野を広げて道外の大学を進学先に選ぶ生徒が増加。進学実績の向上につれて教師の指導もより積極的に

STEP 3

徹底的に手を掛ける指導で  
2割の生徒が国公立大合格

北海道釧路江南高校が進学重視型単位制高校となったのは、2005年度のこと。単位制の研究指定を2年間受けた後、全校で協議した上で、単位制高校となった。その背景には、進学実績向上の起爆剤にしたいという教師の思いがあったと、進路指導部長の山崎健先生は言う。

「本校は地域有数の進学校として期待を集め、生徒も部活動や行事に一生懸命取り組んでいきましたが、他地域の進学校に比べて、生徒を伸ばし切れていないのではないかとこの声もありました。単位制による多様な選択科目の設置、教師の加配を生かした少人数授業などを通して、生徒の学力向上を図ろうと、全校一致で単位制導入を決めました」

同校は北海道の中でも比較的早い時期に単位制に移行した。そのため、モデルとする学校が少なく、試行錯誤を続けながら、釧路江南高校にふさわしい単位制のあり方を模索してきた。

その過程で見いだした1つの方向性が、「徹底的に手を掛ける進路指導」だ。選択科目の履修指導、志望校選択などの過程で、教師が生徒と徹底的にかかわり、生徒が自分の将来像を思い描けるようになることにこだわった。同校がここ数年、進学実績を伸ばし、13・14年度には国公立大合格者が1年次の生徒数の2割に達し

たのも、この手厚い指導の成果だ。進路指導部で1年次を担当する加藤渉先生はこう話す。

「本校の生徒は、良くも悪くも素直です。教師の言うことをよく聞き、言われたことをきちんと言う一方、主体性が希薄な点が大きな課題です。そうした中でも徐々に成果が出始めているのは、面談や履修指導、課外学習など、教師が徹底的に手を掛けることで生徒の意欲を高め、『頑張ろう』という気持ちを喚起しているからだと思っています」



**山崎 健** やまざき けん  
北海道釧路江南高校  
教職歴27年。同校に赴任して14年目。進路指導部長。「自分の足で立ち、頭で考え、手を使って、人生を組み立てられる生徒を育てる」



**加藤 渉** かとう わたる  
北海道釧路江南高校  
教職歴14年。同校に赴任して8年目。進路指導部1年次担当。「広い視野とバランス感覚、熱意のある指導と冷静な分析で、指導をしていきたい」



**佐藤明彦** さとう あきひこ  
北海道釧路江南高校  
教職歴13年。同校に赴任して8年目。教務部3年次担任。「教育の精神は花を育てる雨土の如し」。生徒の可能性を信じ、じっくり育てたい」



**増井誠一** ますい せいいち  
北海道釧路江南高校  
教職歴10年。同校に赴任して3年目。進路指導部2年次担任。「生徒の手本となるよう、全力で生徒と向き合う」

## 独自の「進路シラバス」で 早期かつ短期間で進路意識を醸成

同校が最も力を入れているのが履修指導だ。2年次に向けた科目選択の履修指導が始まるのは、1年次の6月。それを受けて、11月までに志望学部・学科、少なくとも文理の方向性を決める。2年次では11月までに生徒全員が志望校・学部を表明し、3年次に向けた履修登録を行う。つまり、2年次11月には事実上の「志望校宣言」が出来るほどに、進路が具体化している。

当然のことながら、3年次での志望変更はハードルが高い。履修のやり直しは出来ないため、入試方式の選択の工夫や、受験可能な科目のある大学への志望変更などで乗り切れるしなくなる。そのため、低年次の時に、どれだけ具体的に自分の将来像を思い描けるかが鍵となる。3年次担任の佐藤明彦先生はこう述べる。

「入学時点では、生徒の大半が将来像を描けていません。自分はどう生きたい、だからこの科目を履修するというように、主体的に科目選択を行えるよう低年次からの意識付けが不可欠です」

早期に目的意識を醸成する工夫の1つが、14年度に導入した同校独自の「進路シラバス」だ。10年後の自分を思い描いた上で職業調べ、文理選択、大学調べへと進む(図)。1年次4月から「総合的な学習の時間」でキャリア学習に取

り組み、履修指導が始まる6月までの3か月間で、自分の将来像を考えさせる。運用に当たっては、加藤先生が指導案を毎週作成して、担任に配布。次回の授業の狙い、教材の使い方を説明することで各学級の足並みをそろえた。

## 「なぜその大学なのか」 面談で生徒に徹底的に考えさせる

「進路シラバス」での指導は、あくまで「入り口」に過ぎないと加藤先生は強調する。

### 図 「進路シラバス」の「キャリア学習の手引き」コンテンツ

#### 第1編 キャリア学習の手引き

- 第1回 私の職業適性を探ろう ～「職業適性検査」を受検する
- 第2回 現在の私と未来の私を考える ～ワーク「現在の私」「10年後の私」
- 第3回 私の職業興味を考える ～KJ法による職業興味探索
- 第4回 私の希望職種と適性職種を知ろう ～「職業適性検査」結果の分析
- 第5回 気になる職業の内容を調べよう ～「マナビジョン」の活用
- 第6回 現在の学力状況を確認しよう ～「スタディーサポート」の分析
- 第7回 適性学問分野を探ろう ～「文理適性検査」の受検
- 第8回 適性学問分野を知ろう ～「文理適性検査」の結果分析
- 第9回 気になる上級学校を調べよう ～上級学校調べ
- 第10回 社会人の経験を知ろう ～社会人講話
- 第11回 進路へ向けた情報収集をしよう ～校内進路説明会へ参加する
- 第12回 目標上級学校等を選定しよう

\*学校資料から抜粋して編集部で作成

「進路シラバス」は全体の基調講演のようなもの。これだけで生徒が自分で考え、動くようになるわけではありません。大切なのは、教師が生徒とどれだけ対話を重ねたかです。生徒の進路意識をより深めていくためには、教師との綿密なコミュニケーションを取ることが何よりも大切なのです」

二者面談、三者面談の他、掃除の時間、廊下ですれ違った時など、日常生活のあらゆる場面で面談の場となる。内容は、履修登録前なら将来像や大学・学部について、登録後なら学習の仕方など、時期によって異なる。

「生徒には『なぜその大学を選ぶのか』を何度も問い掛けます。志望理由があいまいな状態で3年次に向けた履修登録をさせることはありません。生徒をどれだけ揺さぶり続けるかが、進路選択のミスマッチを防ぐことにつながるのです」(佐藤先生)

学校生活の至るところで進路意識を高めていこうと考えている同校では、授業も自ずとキャリア教育を意識した内容となる。

「数学を入試突破の道具として捉えるのではなく、どのように人生に生かしているかを考えさせたいと思っています。数学的な思考力が身に付けば、おのずと物事を論理的に考えられるようになり、話す力も高まります。人生の礎になるような学びを意識できるように、生徒に語り掛けています」(佐藤先生)

英語科で2年次担任の増井誠一先生は学習への向き合い方を生徒に語っている。

「社会に出れば1人で解決せねばならない問題が山ほど出てきます。自分で情報を集め、新たな知識を得る習慣は、ますます必要になるでしょう。高校時代に学ぶ姿勢や学習習慣をしつかり身に付けておくことが、時代の変化に応じてたくましく生きていくためには必要だと、生徒に語り掛けています」

14年度の1年次では、よりきめ細かい指導を徹底するために、「総合的な学習の時間」で分野別の進路学習会も実施した。年次団が話し合い、学問分野ごとに進路指導の基本方針をまとめた。各分野を学ぶには、どのような大学・学部があるのか、入試にはどのような科目が必要かを洗い出した。また、「この分野は道外にある大学でしか学べない」などの情報を共有した上で、進路指導の細かな方針を確認し、担任間の指導のぶれをなくすように努めた。その上で、文系、理系、看護系などの担当者を決めて、希望分野別にガイダンスを実施した。

## 2人担任制でより手厚い進路指導を実践

より手厚い指導を実現するために、13年度、同校では学校組織を大幅に改編した。2人担任制の導入である。正・副担任という軽重を付け

ず、1学級に同じ立場の担任を2人付け、HRや進路指導など、あらゆる担任業務に同等の責任を持たせた。

「担任1人では全ての生徒を把握できないこともあるため、2人担任制の導入は効果的です。また、複数の視点で1人の生徒を見ることで、生徒が多様な価値観に触れる機会も増えると考えました」(加藤先生)

担任の組み合わせは年次主任による。研修や出張などで2人が同時に学校を不在にすることがないよう、教科や部活動が重複しない組み合わせにし、最終的には、教師一人ひとりと面談をした上で決めている。役割分担は学級ごとに決める。HRは2人一緒にで行うのが普通だが、各教師が日替わりで務めてもよい。面談は2人で学級の生徒全員と行う場合もあれば、出席番号別、志望別などに分け生徒を半分ずつ担当し、前・後期で入れ替えて実施する場合もある。

「担任が互いに引いてしまうと責任の所在があいまいになり、かえって学級経営がうまくいけなくなってしまう。各自が責任を持って積極的に指導に当たり、生徒のために主張すべき時は主張するという意識を持ち続けることが大切です」(佐藤先生)

職員室では年次ごとに固まり、ペアを組む2人の担任が向かい合って座るようになった。おのずと学級の生徒について会話を交わす機会が多くなり、職員室の雰囲気もがらりと変わった。

もちろん、2人担任制ならではの難しさもある。導入1年目に初めて同校で担任を持った増井先生はこう話す。

「基本的な指導方針は年次団で共有していますが、経験や人柄によって考え方や指導のスタイルは異なります。時には担任2人の意見が全く異なり、調整が難しい場合もあります。多様な考え方に触れるという意味では、我々教師にとっても毎日が勉強です」

教師の指導スタイルの違いが生徒の履修指導に影響を与えないように、14年度の1年次では2人の担任のうち、同校での担任経験の長い教師を「履修担当」にした。

「教師の多様性を認めるのは大切ですが、履修に関しては出来るだけ学校の方針に基づいて一本化することが理想です。履修担当は学級の履修指導を主導するだけでなく、履修指導に関する年次の方針を決める会議にも出席し、担任間で方向性を共有できるように配慮しました」（加藤先生）

## 生徒の視野が広がり 道外の大学を選ぶ生徒が増加

きめ細かい進路指導で実績を上げ続けている同校。近年は合格者数の増加だけでなく、志望校のエリアが顕著に広がっている。北海道は生徒・保護者とも地元志向が強く、これは釧路地

域も例外ではない。しかし、同校では関東を中心に道外に目を向ける生徒が年々増えている。

「担任があえて道外を勧めているわけではありません。進路学習によって生徒の視野を広げ、何をしたいのかを面談で徹底的に問いつけた結果、北海道を出るという選択に至っているのです。最初は道外の学校を志望することに反対している保護者も、生徒自身が目的意識を持ち、その覚悟を伝えれば、教師が説得しなくてもおのずと了承するようになります」（佐藤先生）

生徒の変化に応じ、教師の意識も変わった。「先生方が朝学習や放課後補習、土曜日講習などの課外学習を積極的に行う場が増え

ました。生徒の頑張りを見て、生徒をもっと支援しようという意識が高まっているのだと思います」（山崎先生）

生徒の進路意識の高まりが、教師や保護者の意識も変える好循環を生んでいるのだ。教師は必ずしも現状に満足しているわけではない。

「進学実績の伸びは成果の1つですが、あくまで教師が徹底的に手を掛けた結果にすぎません。主体性の涵養（かよう）という意味では、理想の実現にはまだ遠いのが現状です。これから引き続き、生徒の主体的な学びを引き出す工夫を重ね、『これが釧路江南高校の指導だ』と自信を持って言えるスタイルを構築していきたいと考えています」（加藤先生）

## 情熱 若手教師が語る、指導変革への

### 自分自身が成長できた 先輩教師との出会い

2年次担任 増井誠一

前任校は大学進学者がいない学校で、そこで8年間勤務してから、3年前に本校に赴任しました。進学校は初めての経験で、受験指導をしたことはありませんでしたが、同じ年次になった2人の先輩の先生から、進学校における「指導の型」を徹底的にたたき込まれたのは幸運でした。

また、先輩方は朝早く出勤する私を見て、「0時間講習」を企画してくださいました。教室が満杯になるほど生徒が集まったことは忘れられません。更に、英語が苦手な生徒に、私のところに質問に行くように声を掛けてくれました。今も続く個別指導のシステムが出来たのも、2人の先生の支援があったからです。

進路指導では「数字はうそをつかない」という考え方を教わりました。先輩方のすごいところは、データ一辺倒で指導するのではなく、生徒にとことんかかわって、彼らの心をしっかりとつかんでいることです。生徒の心に火をつける指導が出来ているからこそ、客観的なデータを使った指導が生きてくることを学びました。

先輩方の指導をどんどん吸収して、生徒の心をつかめる教師になりたいと思っています。主体性の低さが本校の生徒の弱点ですが、やれば出来る生徒はたくさんいます。教師が徹底的に生徒とかがわり、彼らの心に火をつけることで、生徒たちの可能性も広がっていくのではないのでしょうか。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2008年12月号指導変革の軌跡「北海道札幌旭丘高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け



埼玉県・私立  
はな さき とく ほる  
花咲徳栄高校

## アクティブラーニング

# 生徒の活動中心の授業に 全校を挙げて切り替え 自ら学ぶ姿勢を育てる

◎「人間是宝」を建学の精神、「今日学べ」を校訓とする。2013年に全校でアクティブラーニングを導入。14年、文部科学省事業「スーパー食育スクール」指定。ボクシング部、競泳部、空手道部、野球部など、全国大会で活躍する部が多い。

### 設立

1982(昭和57)年

### 形態

全日制／普通科・食育実践科／共学

### 生徒数

約1870人

### 2014年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、北海道大、茨城大、宇都宮大、埼玉大、国際教養大、高崎経済大、埼玉県立大、横浜市立大などに21人が合格。私立大は、青山学院大、上智大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ776人が合格。

### 住所

〒347-8502  
埼玉県加須市花崎江橋519

### 電話

0480-65-7181

### Web Site

<http://www.hanasakitokuharu-h.info/>

## 変革のステップ

### 背景

◎講義形式の一斉授業や学習量を重視する指導で生徒の学力を伸ばすことに、多くの教師が限界を感じていた

STEP 1

### 実践

◎主体的に学ぶ力を身に付ける教育であるアクティブラーニングの全校での導入を決定。年4回の研究授業などで教師個々の指導力向上を図る

STEP 2

### 成果

◎授業や学校行事に主体的に参画する生徒が増加。教師集団の一体感や、切磋琢磨して互いを高め合う意識が醸成される

STEP 3

## アクティブラーニングを導入し 自ら考え、行動できる生徒を育てる

埼玉県加須市にある私立花咲徳栄高校は、生徒数約1870人、教員数約140人の大規模校だ。同校が全校を挙げてアクティブラーニングを授業に取り入れ始めたのは、2013年度のこと。多くの県立高校で学校改革を主導してきた小林清木校長が赴任し、授業改革を提案したのがきっかけだった。

「本校には、初代理事長の佐藤栄太郎先生が掲げた『今日学べ』という校訓があります。過去の成功例は、必ずしも未来を保証するものではありません。未来に向けて何をすべきか考え、今できることに最善を尽くすのが大切です。そのために何よりも必要なのは、自立した生徒を育てること。自己管理ができ、自ら考え、決断・行動できる力を育むために、従来の一斉授業を改め、生徒が受け身となりやすい授業形態からの脱却を図ることから始めようと考えました」(小林校長)

教師も従来の授業に限界を感じていた。教務科長補佐の杉嶋徹先生はこう述べる。

「本校では、これまで0時限、7・8・9時限授業を設け、学習量を重視する指導を行ってきました。それにより、一定の進学実績も上げてきましたが、必ずしも量に見合うだけの学力が生徒に身に付いているとは言えない

状況でした。量重視から質重視への転換を図り、生徒が主体的・能動的に取り組む姿勢を育むことが必要だと感じていました」



**小林清木** こばやし きよき  
花咲徳栄高校校長  
教職歴40年。同校に赴任して2年目。「今日学べ」未来を想像し、今やるべきことをやる」



**北野耕司** きたの こうじ  
花咲徳栄高校  
教職歴31年。同校に赴任して32年目。進学指導科長補佐。「日々新しい発見のある授業を目指す」



**柏嶋徹** まつしま とおる  
花咲徳栄高校  
教職歴27年。同校に赴任して26年目。教務科科長補佐。「分かるまで。出来るまで」生徒に積極的に関わり、育てていきたい」



**齊藤久士** さいと う・ひさし  
花咲徳栄高校  
教職歴13年。同校に赴任して14年目。アクティブラーニング推進委員長。「生徒一人ひとりの内在する可能性を拓き、生徒と共に成長し続けたい」



**星加奈** ほし・かな  
花咲徳栄高校  
教職歴13年。同校に赴任して1年目。アクティブラーニング推進委員。「常に夢や希望を語り合える存在でありたい」



**天宮さやか** あまみや さやか  
花咲徳栄高校  
教職歴7年。同校に赴任して8年目。アクティブラーニング推進委員。「生徒一人ひとりと向き合い、夢に向かって前進する後押しをしたい」

## 研究授業・公開授業で 教師が認め合う風土を醸成

13年6月、アクティブラーニングの専門家を招き、教師全員で研修を受けるところから改革は始まった。13年度は研修を4回実施。アクティブラーニングの目的や方法の説明を受けた上で、教師が生徒役・教師役となる研究授業、授業後の振り返りや意見交換などを行った。14年度は10月までに研修を3回行い、各教科が2回ずつ研究授業を実施。学年や教科の橋渡し、研修の企画・運営は、各教科から1人ずつ選ばれたアクティブラーニング推進委員が担当する。

多くの教師が得るものが大きかったと言うのが、研究授業後の振り返りだ。授業者が授業を振り返って狙いや手応えを語り、参観者は授業の良い点、参考にした点などを伝える。英語科の星加奈先生はこう話す。

「互いに認め合い、良い点を学び合うのが、研修の狙いです。授業でうまくいかなかったところは自分が一番よく分かるので、他の先生に質問して意見を聞き、次の授業に生かすことも出来ます。回を重ねるごとに、先生方が互いに高め合おうとする雰囲気になります。なっていくのを感じます」

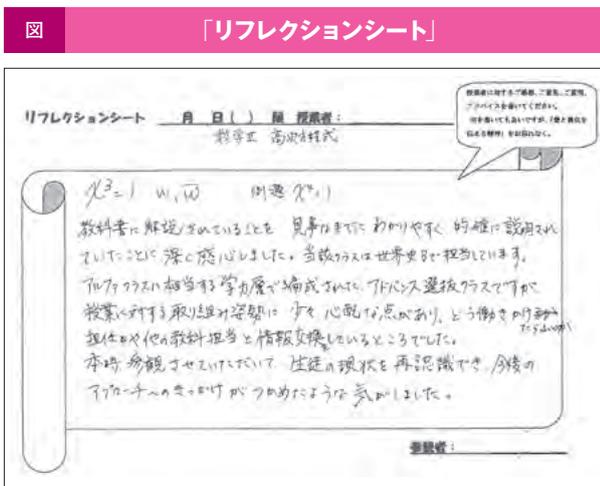
14年度は2週間の公開授業も行った。公開1週間前に、授業の公開日時を各教科一覧にして提示。どの教師も最低1回は公開したが、熱心

な教師は4、5回公開したという。一方、授業の参観は1人最低2回とし、参観後は必ず「リフレクションシート」(図)を記入・提出し、後日、その内容を授業者にフィードバックした。

## 授業改革の根底にある 教師一人ひとりの課題意識

同校で一斉に授業改革が進んだのは、既に教師の間に、活動中心の授業にしたいという思いが生まれつつあったからだ。アクティブラーニング推進委員長の齊藤久士先生は、数年前から自分の授業を変えようと思っていたのは、『VIEW W

「授業を変えよう」と思ったのは、『VIEW W



「リフレクションシート」には、参加者全員がヒントを得られるよう、授業の良い点やまねきたい点を書くのがルール。  
\*学校資料をそのまま掲載

21」で読んだ記事がきっかけでした。知識の定着率は、自ら体験すると7割以上、他人に教えると9割以上となり、講義や読書から得る知識よりも、定着率は高いとありました。それに触発され、私は知識伝達型の一斉授業から活動主体の授業にしようと、テキストや発問に工夫を重ねました」

国語科担当の天宮さやか先生も、従来の講義形式の授業に限界を感じていた。生徒は静かに授業を聞いているが、定期考査や模試の成績はなかなか伸びなかった。そんな時、外部研修でアクティブラーニングの手法を知り、古文の授業でグループ活動を行ってみた。すると、古文の苦手な生徒が積極的に話し合う姿が見られ、授業後のアンケートでは、「古文が分かるようになった」と答える生徒が増えたのだ。

そのように、アクティブラーニングの良さを実感している中堅・若手の教師が推進委員として学年や教科の橋渡しになったことで、改革の実効性が高まったと同校は考える。

## なぜ学ぶのかを 生徒自身に気付かせる

アクティブラーニングはグループ活動が中心だ。席の近い4〜6人でグループとなる場合が多いが、その科目が得意な生徒、苦手な生徒がバランスよくグループに入るように配慮するこ

ともある。いずれにせよ、メンバーが固定しないようにするのがポイントだ。

「毎回同じ顔ぶれですと、同じようなポイントで行き詰まってしまうがちです。他のグループは違う調べ方をしていたり、別の情報を持っていたりすることもあります。生徒が新たな発見を得られるよう、定期的にメンバーを変えています」（天宮先生）

授業の基本的な流れは、最初に前提となる知識や理論、考え方を説明した後、グループで課題に取り組み、最後にグループ間の意見交換や定着を図る確認テストなどを行う。もちろん、単元や時期、学年によって、教師の説明と生徒のグループ活動のバランスは変わる。世界史の授業の場合、1・2年生ではグループ活動が中心だが、3年生では大学入試を見据え、教師がまず出題のポイントを解説し、各自が演習問題を解くというプロセスを経た上で、グループで意見を出し合いながら問題の最終的な答えを考えるといったスタイルで行うこともある。

「問題演習型の授業でも、アクティブラーニングは有効です。分からない相手に教えるために、教える側は内容をより深く理解しようとしています。教える相手だけでなく、自分の理解も深まるのです。そのため、1人で取り組むよりも、学習内容の定着度が高まります」（松嶋先生）  
古文では、苦手意識を持つ生徒が多いため、

単に文章の内容を理解させるだけでなく、作品の背景知識にも着目させる。例えば、『源氏物語』の物語全体をグループで調べさせると、堅苦しいイメージと違って意外に面白い内容だと分かり、授業に向かう気持ちも変わる。文法事項も、なぜその人物が主語なのか、なぜその語が助動詞と識別できるのかなどをグループで考えさせると、生徒は意欲的に取り組むという。

「これまでなら教師が教えていた部分を、生徒自身になぜそうなるのかを考えさせています。生徒が自ら気付けば、内容をより深く理解でき、定着率も高まります。更に、なぜ文学史や文法を学ぶのかという認識にもつながっていくのです」（天宮先生）

## 学習歴の違う生徒が協力し合うことが 学びのレベルを高くする

英語科担当の星先生は、生徒の学習歴の違いが、グループ活動では利点になると指摘する。

「1年生では中学校で培った英語力にかなりの違いがあります。英文を読む時に、知っている単語をつなげて理解しようとする生徒がいる一方、文章の構造から理解しようとする生徒もいます。そうした学力や学習歴の違いのある生徒たちを1グループにすると、互いの弱点を補いながら、答えを導き出そうとします。協力し合うことで実力以上の力を発

揮できることを、生徒たちは学ぶのです」  
アクティブラーニングを取り入れると、授業進度が遅れるのではないかと指摘もあるが、その点について、進学指導科長補佐の北野耕司先生はこう説明する。

「本校でも、導入前に授業進度の遅れを懸念する声がありました。解決策の1つとして、例えば、理科では教科書の進度に合わせて、その時間に学ぶ内容をまとめたプリントをグループで取り組ませています。以前は教師が全ての内容を説明していましたが、アクティブラーニングでは、教師は生徒たちだけでは答えを導き出せなかった部分やプラスアルファの部分に絞って説明すればよいので、進度が遅れることはありません」

世界史担当の齊藤先生も教材を工夫し、進度を確保している。

「板書と同じ内容のプリントを作り、テキストとして活用しています。私は板書の時間が、生徒は板書をノートに書き写す時間が省きました。それによって、グループ活動の時間を捻出するだけでなく、生徒が教師の説明を集中して聞くようになりました」

## 「アクティブラーニング通信」で ノウハウの共有を更に図る

アクティブラーニングを導入して1年半が経

ち、活発に自分の意見を述べる生徒、主体的にグループ活動に参加する生徒が目に見えて増えた。その意識は課外活動にも波及し、文化祭などの行事でも、生徒同士が意見を述べ合って活動に取り組む姿が見られるという。

試験への姿勢も変わった。以前は定期考査で少し複雑な記述問題が出ると、無解答が多かったが、今ではほとんどの生徒が解答欄を埋めようと努力する。間違いを恐れず、自分の考えを言葉にしようとする生徒が増えているのだ。

教師の意識もより前向きになった。研修を重ねるに連れて自信を付け、公開授業の担当に積極的になる教師が増えた。また、職員室では、授業の方法について語り合う教師の姿が

日常的に見られるようになった。今後は、「リフレクションシート」や新しい取り組みを行う教師の声などを掲載する「アクティブラーニング通信」を定期的に作成・発行し、教師間のコミュニケーションの深化と、学年や教科を超えたノウハウの共有を進めていく考えだ。

「教師全員がスキルやノウハウを共有すれば、1人の教師の経験が皆の経験になります。1人の教師が140人分の力を得ることになるので。皆で支え合い、出る杭を伸ばしながら、いずれは日本一の教師集団を育成していきたい。それは、日本一の生徒を育てるといこと。生徒・教師共に『日本一』を目指して改革を進めていきます」（小林校長）

## 情熱 若手教師が語る、指導変革への

### 授業改革のヒントを得ると共に 他校の先生から勇気をもらおう

3学年担任 天宮さやか

教師になってからしばらくは、授業は生徒が静かに前を向いて教師の話聞くものという意識で取り組んできました。ところが、私の話をしっかり聞き、ノートもきちんと取っているのに、試験の結果が思わしくない生徒が少なからずいました。プリントを用意したり、課題や小テストを工夫したりしても成果はなかなか上がらず、もどかしい思いで授業を行っていました。

そうした折、先輩の先生に誘われてアクティブラーニングの研修を受けたのです。「生徒が静かに教師の話聞くだけが授業ではない。こうした方法もあるんだ」と、ぱっと目の前が開けました。早速、授業で試したところ、生徒の意欲は目に見えて高まり、「これだ」と確信しました。そうした経緯から、学校全体で授業改革が始まった時、私は国語科のアクティブラーニング推進委員に選ばれました。最初は公開授業の日程を調整するのも大変で、1、2人しか手を挙げない教科もありましたが、回を重ねるごとに積極的に授業を公開する先生が増えていったのはうれしかったです。

委員として外部研修によく参加するようになり、大きな刺激を受けています。また、他校の先生と互いに悩みを共有することで、どの先生もそれぞれの学校で課題を持ち、その解決のために試行錯誤されていることを知り、とても勇気付けられました。今後は委員として、外部の情報を校内の授業改革に反映していくことにも力を入れていきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2010年12月号指導変革の軌跡「岡山県立邑久高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け

# 「もっと響く指導」に するために！ 生きたデータの徹底研究

「データ」を活用して客観的に生徒の状況を捉え、指導の方針を整理する方策を2006年から12年まで伝えてきた「生きたデータの徹底活用」のコーナー。更に響く指導を実現するために、これまで掲載した記事を基に現場の先生方と改めて指導のポイントを確認し、「データ」の改良を検討します。

## テーマ 3年生0学期の保護者への働き掛け



「生きたデータ」2012年12月号を参考に、  
生徒と保護者の進路についての対話を促したところ……

### ● 進学に対する生徒と保護者の考え交流シート

( )年 ( )組 名前： ( )

	生徒の思い	担任コメント	保護者の思い	担任よりご家族へ
何のための大学進学か・ どんな大学に 進学したいか				
大学生活で 力を入れたいこと				
大学卒業後の夢、希望				
3年生をどのように 過ごしたいか				

ダウン  
ロード

#### 私の狙い

3年生0学期に家庭でのコミュニケーションの土台を築き、進路について話し合ってもらおうと考えた

#### 取り組み内容

生徒と保護者に進路への思いを書いてもらい回収した。担任からのコメント欄は、設けたものの多忙だったので割愛した

#### 感じた課題

従来の進路希望調査との違いが明確にならず、家庭でのコミュニケーションのきっかけとして十分に機能しなかった。私自身が活用しきれなかったという課題もあった

「もっと響く指導」  
のポイント

①

保護者と教師がチームになり  
生徒の志望を後押しする



文化祭や体育祭などの行事が終わった3年生0学期は、生徒の意識を受験に向けて切り替えるのに絶好の時期です。本校でも生徒に様々な働き掛けを行っていますが、ここ数年、保護者へのアプローチも重要だと感じるようになりました。



私もそう思います。近年、保護者が子どもの志望を十分理解できておらず、進路決定時に衝突が生じることがあります。無意識に子どもの志望よりも自分の思いを優先している保護者が少なくないようです。保護者が子どもの志望を理解して、教師とチームになって子どもを応援する雰囲気づくりが2年生の段階から必要だと思います。



そこで私は、前任校で2年生の担任を務めた時、上の図のような生徒と保護者のコミュニケーションを活発化させるためのシートを配布しました。しかし、本来は担任もコメントを記入するべきところを、多忙を理由に割愛してしまったのです。そのせいか、保護者からは表面的な記述が多く、特にコミュニケーションが活発になったという手応えは得られませんでした。



保護者は「担任の応援の言葉」を聞いたかたのではないのでしょうか。この時期の多忙さは私も分かりますが、ひと言でも担任としてコメントを記入し、それを家庭に返却するべきだったと思います。コミュニケーションは記入時ではなく、担任を含めた3者のコメントがそろった時に始まるのではないのでしょうか。

\*このコーナーは、高校の先生方（今回は関東）との検討会の内容を基に構成しています。

#### 若手先生代表

関東の公立高校に勤務。14年度は2回目の2学年担任。



A先生(30代)

#### ベテラン先生代表

関東の公立高校に勤務。14年度は2学年主任を務める。



B先生(50代)



## 「もっと響く指導」のポイントと「生きたデータ」活用改訂案



### ●生徒・保護者・教師の進路検討シート

( ) 年 ( ) 組 名前: ( )

現時点での志望校		目標SS	入試科目
1.	● ● 大学 △ △ 学部 □ □ 学科	65	センター試験 国 数 英 地 公 理 個別学力試験 国 数 英 地 公 理
2.	◎ ◎ 大学 ▲ ▲ 学部 ■ ■ 学科	63	センター試験 国 数 英 地 公 理 個別学力試験 国 数 英 地 公 理

	生徒の思い	保護者の思い	担任の思い
何のための大学進学か・どんな大学に進学したいか	本やマンガが好きなので文学部に行きたい	資格の取れる大学に進んでほしいです	部活で頑張った強さがあれば、数学もきっと克服できると信じています!文学部からいろいろな進路が広がります(もちろん教員免許も取れる大学もあります)。これから話し合っていきましょう!
大学生活で力を入れたいこと	バイトしたい!	学業に集中して、将来を見据えてほしいです	
大学卒業後の夢、希望	マスコミの仕事か、海外で働きたい	地元で教師か公務員に……	
3年生をどのように過ごしたいか	苦手な数学も頑張る	今まで部活ばかりだったので、勉強してほしいです	

「もっと響く指導」のために改訂すると……



A先生が参考にしたシートは、生徒と保護者それぞれが記入した内容に対して担任がコメントする書式でした。それを負担に感じるようであれば、担任からのコメント欄は1つにしてもよいと思います。



正直、負担感もありますが、生徒や保護者の言葉に対して何を書けばよいか見通しが立っていなかったところもあります。そのため、担任のコメントを省略してしまいました。



担任のコメントは、生徒を褒め、志望を応援するものがよいと思います。「何のために学びたいか」「どんな力を身に付けたいか」など、生徒の思いを受け止めて、心から応援するひと言を入れましょう。気持ちを前向きにするコメントを読めば、家庭での会話も弾みます。志望理由をきちんと述べるのが出来ない生徒のために、入試科目など、調べれば書ける項目を用意するのも一案です。担任は得意教科を材料に生徒を褒めることが出来ます。私は若手の頃、先輩の先生に「保護者の前で、生徒の長所をたくさん挙げられる教師が優れた教師だ」と言われたことがあります。担任が生徒の長所を理解していることが保護者に伝われば、保護者も安心して家庭での子どもの様子や、子どもとの間の心配事を話してくれると思います。保護者の心を開く、暖かな太陽のような応援の言葉を担任が記入すれば、3年生の学年団への前向きな引き継ぎ資料としても活用できるでしょう。

### プラスαの検討ポイント

From 編集部

### 保護者と教師がチームとなるには3年生0学期が絶好のチャンスか?

今回の検討会では、進学校の先生から「近年、落ち着いて受験勉強に臨めない生徒を見ると、保護者とのコミュニケーションに原因があるケースが増えている気がしてならない」という声が出ました。3年生0学期に担任が保護者と直接話をする機会が確保されているケースは少ないようですし、「受験生の保護者」としての意識付けは3年生の学年団が担う学校が多いのが現実です。「進路について子どもと十分に考えられない保護者が増えているならば、保護者への働き掛けも前倒しすべきかも……」という声を先生方はどう受け止めますか?



「生きたデータ」2012年12月号を参考に、  
受験生の保護者に求める姿勢を明文化したところ……

「もっと響く指導」  
のポイント

②

# 3年生0学期からの1年間を見通し、 学年方針を伝えながら保護者を受験生の親に

ダウンロード

## ●「受験生の保護者」の姿勢チェックシート

チェック	解説	例えばこんな言葉を発していませんか？
お子様の考えにも、耳を傾けていらっしゃいますか？	インターネットの急速な普及などからも分かるように、社会は速いスピードで変化しており、保護者の方々の体験や知識が通じない場面も出てきています。自分の意見は今も正しいのか？ 別の見方があるのでは？ など1歩引いてみて、お子様に聞いてみることも大切ではないでしょうか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●○○学部なんかに進学しても就職先はない(○)</li> <li>●○○学部に行けば就職は心配ない)</li> <li>●○○大学は、自分が高校生の頃は人気なかった</li> <li>●○○大学は資格試験の合格者が多いからお勤めだ ※もしかすると、受験者数が多いだけで、合格率は低いかもしれません！</li> </ul>
今の成績だけで合格可能な大学を考えておられますか？	2年生の3学期からの頑張りで、3年生の夏から秋にかけて、成績がグンと伸びる受験生はたくさんいます。また、今はまだ成果は出ていなくても、お子様は十分に努力をしているのかもしれない。今の成績だけで志望大を決めるのは早計です。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●どうせ○○大学なんて無理に決まっている</li> <li>●○○大学に行くなら、浪人しないと(もちろん浪人なんてさせられない！)</li> <li>●○○大学に合格したいなら、もっと何倍も勉強しないと</li> </ul>
大学卒業後を見通してアドバイスされていますか？	大学さえ卒業すれば何とかなる時代、大学名だけで幸せな一生が送れる時代ではなくなりました。4年間強い興味を持って、人生の土台づくりとして学び続けることが出来る大学や学部をお子様は	<ul style="list-style-type: none"> <li>●とにかく○○大学より偏差値が上の大学じゃないといけな</li> <li>●○○大学さえ出れば何とかなる</li> </ul>

### 私の狙い

保護者に、もうすぐ受験生になる子どもとの向き合い方、求められる姿勢を理解してもらいたかった

### 取り組み内容

受験生の保護者に求められる姿勢の一覧を作成してクラス通信に掲載。各家庭に配布した

### 感じた課題

保護者からの反応は無かったが、先輩教師から「上から目線ではないか」と指摘された。学校の要望は伝えたが、学校として生徒をどう育てたいかは伝わらなかった



前任校では3年生0学期に、クラス通信の中で受験生の保護者として求められる姿勢をお伝えしました。保護者からは特に反応は無かったのですが、先輩の先生から、保護者が「学校から叱られている」と感じるのではないかという指摘がありました。B先生はこれをご覧になってどのようにお感じになりますか？



A先生が作成したような「NGワード集」は私も作ったことがあります。保護者会で配り、説明したのですが、保護者の方も「そうそう、つい言ってしまうのよね」などと、反応は良かったです。つまり、ネガティブな内容であっても、保護者の前で教師が感情を交えて説明すれば、保護者の共感を得られる可能性は高くなるけれど、配布物のような一方的な発信では、想定外の受け止められ方をされるリスクもあるということだと思います。



確かにそうかもしれません。私としても「NGワード」を機械的に頭に入れていただくことを望んでいたのではなく、これをきっかけに、受験生になる我が子の接し方について考えていただきたかったのです。



ええ、私も「学校は、保護者と一緒に考えようとしている」ということを伝えられるかどうかポイントになると思います。

ダウンロード

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ダウンロードできます！

生徒指導・進路指導ツール集

ベネッセ教育総合研究所

<http://berd.benesse.jp>

生きたデータ

検索

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも同じウェブサイトでご覧いただけます。併せてご利用ください！

HOME→教育情報→高校向け→

生徒指導・進路指導ツール集をご覧ください

2010年度10月号 生徒と教師の助走期間としての3年生0学期の意識付け  
2011年度10月号 教師、生徒の準備期間としての3年生0学期の指導  
2012年度12月号 保護者を「受験生の保護者」にする2年生冬休みからの働き掛け



「もっと響く指導」のポイントと「生きたデータ」作成改訂案



●受験までの1年間を知り、保護者としてどうかかわるかを考えるための資料

	行事	生徒の様子	保護者へのお願い
1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>センター試験校内プレテスト</li> <li>進研模試(記述)</li> <li>生徒と保護者の進学意識調査</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>センター試験までちょうど1年となり、3年生0学期の緊張感を持っていますが、冬休みの生活リズムからなかなか抜け出せない生徒もいます。</li> <li>授業では「3年生0学期のうちに苦手克服を目指そう」と声を掛けていますが、実際に着手できている生徒と、3年生になってから始めようと後回しにしている生徒に二極化しています。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校では意識的に「受験まであと1年」と声を掛け、受験生としての緊張感を高めています。進学意識調査などをきっかけに、ご家庭では入試の先にある「大学での学び」「大学生活」に目を向けさせてください。本人が興味を持っている研究や、大学生活の夢を聞いてあげることが、勉強に取り組む意欲につながります。</li> <li>3年生で自立して学習が行えるよう、この時期からはあえて学校からの課題を増やしています。これは生徒一人ひとりが取り組むべき学習内容の優先順位を考えていけるようにするためです。ご家庭では、食事や睡眠などの生活面でのサポートをお願いします。</li> <li>進学意識調査の内容によって、個別に担任教師との面談をお願いします。その際はご協力をお願いします。</li> </ul>
2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>学年末考査</li> <li>二者面談</li> <li>進研模試(マーク)</li> <li>進路研究発表会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>私立大入試が本格化し、個別学力試験も行われるこの時期、2年生は「3年生の先輩はどこを受験するのか(自分は来年どこを受験することになるのか)」と大学入試への関心を高めています。</li> <li>担任教師との面談を通して「志望校合格までどれだけギャップがあるか」「そのギャップをどう埋めるか」を考えている時期です。3年生に進級してからの学習を準備するために、春以降、3年生の計画表へと続く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各大学の倍率や難易度などが家庭でも話題になることが多くなる時期ですが、「難易度や倍率が高い大学が良い大学」ということではなく、「本人が学びたいことを存分に学べる大学が良い大学である」という気持ちで、ご家庭でも語り合ってください。大学を安易に序列化するような言葉ばかりだと、お子様が家庭で進路のことを話しにくくなってしまいます。</li> <li>生徒の中には、春休みの学習として新しい問題集を探したり、塾や予備校の講習会への参加を考えたりする子が出てきます。しかし、基本的にはこれまでに使ってきた教科書や問題集を使った家庭での学習を大切にさせてください。</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学生と語る会</li> </ul>		

「もっと響く指導」のために  
改訂すること……



大学入試を理解するための最低限の知識が、3年生0学期の保護者には必要です。具体的には模試帳票の見方や考え方、出願・入試日程などの情報です。それを理解していただいた上で、学校が「日々の授業を大切にして基礎学力を固め、高い志望を実現することを目指している」という指導方針を保護者に伝えることがポイントです。



入試に関する情報だけでなく、学校としての指導のあり方をしっかり伝えることで、保護者の漠然とした不安が解消されそうですね。



更に、保護者自身が「受験生になった子どもとどう向き合うか」を考える機会になる資料が望ましいですね。一般論で考えるのではなく、我が子にもっと手を掛けるべきか、あるいは徐々に手を離していくべきか、これまでの子どもとの関係も踏まえて考えるきっかけにしてもらいましょう。



進路実現のために生徒はどんな思いを抱え、学校はどんな指導を行っているかを伝えた上で、3年生の保護者としての姿勢を考えるきっかけとなる資料が必要なのでしょうね。



そう考えると「NGワード集」のような見せ方を改め、「学校からの提案」を伝えていく項目を設けてもよいでしょう。3年生0学期をこれからの1年間の覚悟を求める時期とするのであれば、保護者に対しても1年間を見通しながら、「学校と一緒に頑張りましょう」と呼び掛けるツールを考えたいですね。

プラスαの検討ポイント

From 編集部

目の前にいる  
生徒・保護者に合わせて  
取り組みを  
検証

保護者に対する働き掛けが重要であるという点では、今回の検討会に参加した5人の先生方の意見は同じでした。ただ、「何を、どのように伝えるか」という点では各校で苦勞をされているようです。実際、進路指導計画に「保護者に、授業が入試学力の土台となることを理解してもらおう」と記述されていても、どんなデータや言葉で、どのタイミングでそれを伝えるかは、学年方針や生徒の特性によって変わります。自校の状況を踏まえて、3年生0学期の保護者にどう働き掛けるか、毎年新たな気持ちで見直すことが必要かもしれません。

# スーパーグローバル大学事業で日本の大学はどう変わるか？

文部科学省 高等教育局 高等教育企画課 国際企画室室長

松本英登<sup>ひでと</sup>

文部科学省は、2014年度、大学の国際化促進を目的に、「スーパーグローバル大学創成支援」(以下、SGU事業)を始めた。この事業は支援規模の大きさが話題となっているが、文部科学省がSGU事業に取り組む背景は何か。SGU事業によって、大学はどう変わるのか。そして、大学が変わることが高校現場に与える影響は何か。本事業の担当部局である文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室室長の松本英登氏に話を聞いた。

## 世界大学ランキングに10校以上をランキングさせる

文部科学省は、2014年度、国際化を徹底して進める大学を重点的に支援することを目的とした「スーパーグローバル大学創成支援」(以下、SGU事業)を始めました。支援対象は、タイプA「世界大学ランキングトップ100を目指す力のある大学」、タイプB「これまでの

取組実績を基に更に先導的試行に挑戦し、我が国社会のグローバル化を牽引する大学」です。実施期間は最大10年間。1校当たりの補助の標準額は、タイプAが4.2億円程度、タイプBが1.7億円程度で、初年度は、タイプA13校、タイプB24校の計37校を採択しました。本事業の背景には、大学の国際通用性を今以上に高めなくてはいけないという危機意識があります。2013年5月に発表された教育再生

## 「スーパーグローバル大学創成支援」事業とは

◎「スーパーグローバル大学創成支援」では、「世界トップレベルの大学との交流・連携」「人事・教務システムの改革」「学生のグローバル対応力育成のための体制強化」など、国際化を徹底して進めようとしている大学を重点的に支援する。国がこの事業を始めた背景には、経済社会のグローバル化が進む中で、我が国が今後も世界と伍して発展していくためには、大学の国際競争力向上と、グローバルに活躍できる人材の育成を行うことが不可欠であるという認識がある。

支援対象大学をタイプAとタイプBに分けた。タイプAでは、世界大学ランキングトップ100を目指す力のある大学を支援。海外大学との領域横断型共同カリキュラムの構築、優秀な学生や研究者が集う環境整備に取り組むことなどを想定している。タイプBでは、これまでの取り組みの実績を基に更に先導的試行に挑戦し、我が国社会のグローバル化を牽引する大学を支援する。大学教育のグローバル化モデルの構築や、世界基準の教育展開等に取り組むことなどを想定している。事業実施期間は最大10年間。2014年度予算額は77億円だ。



まつもと・ひと 1998年、旧科学技術庁入庁。  
2011年、在スウェーデン日本国大使館一等書記官などを  
経て、2014年8月から現職。

実行会議第3次提言では、日本の大学のグローバル化に向けた取り組みの遅れは危機的状況にあり、大学の再生は日本が再び世界の中で競争力を高め、輝きを取り戻すための大きな柱の1つになるとしています。そして、「国際化を断行する大学を重点的に支援し、今後10年間で世界大学ランキングトップ100に10校以上をランキングさせる」と提言しました。この提言などを受け、安倍内閣は日本再興戦略の一環としてSGUの創設を閣議決定。これを受けて、本事業が始まることとなりました。

世界大学ランキングトップ100に10校以上をランキングさせるという目標には、「即物的」という印象を抱かれる方もおられるようです。しかし、世界的には、大学ランキングが大学を評価する尺度として、好むと好まざるとにかか

わらずに、参照されています。例えば、学生が留学先を選ぶ際や、研究者が自分が籍を置く大学を選ぶ際、また、大学間の国際的な共同研究が盛んに行われる中で大学が連携先を探す時にも、大学ランキングが参照されています。

つまり、優秀な学生や研究者を確保し、主要な日本の大学が教育・研究の両面で世界レベルであり続けるためには、世界大学ランキングでプレゼンスを保つことが必須条件となりつつあるのです。世界中の優秀な学生や研究者が日本の大学に集まる状況をつくり、日本人の学生にとっても、多様性のある環境の中で刺激を受けながら質の高い教育が受けられるようにしなければなりません。世界で活躍できる人材を、日本の大学で育てられるようにすることが必要です。

### 研究以外の面で 国際化が遅れている日本の大学

このため、前述のように、タイプAは、世界大学ランキングにおいて上位に入れる高い教

育・研究力を有している大学を採択しました。ただし、SGU事業で支援するのは、大学の研究面ではなく、教育とガバナンスに対してです。タイプAに採択された13校は、いずれも文部科学省の研究面での強化を目指した「研究大学強化促進事業」に既に採択されており、更に、一部の大学は「世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)」の対象にもなっています。これらの大学では、研究面での強化に加えて、SGU事業における大学の教育とガバナンスの機能強化を促進することを通じ、結果として、ランキングの上昇を目指そうとしています。

イギリスの高等教育専門誌『タイムズ・ハイアー・エデュケーション』が発表する「世界大学ランキング」を見ると、日本の大学でトップ100に入っているのは、東京大と京都大のみです。しかし、研究面を見れば、我が国には十分にランキングできるだけの優れた実績を残している大学があります。ところが、外国人教員比率や外国人留学生の割合といった国際化の面で大きく遅れているために、順位を下げる結果となっています。この外国人教員の比率が低い要因としては、人事システム等が外国人の教員の雇用を促進する仕組みになっていないことが挙げられます。また、外国人留学生については、渡日前入学のシステムが整備されていないなど、他国の大学に比べて留学のハードルが高いことが課題となっています。

このように、日本の大学の国際的評価を高めるためには、研究の強化だけでは不十分で、教育やガバナンスの国際化を図ることが急務と なっているわけです。

## 国際通用性を高めるために 抜本的な大学改革を促す

そこで、SGU事業の公募では、タイプA・B共に、①「国際化」②「ガバナンス改革」③「教育の改革的取組」の3つの観点で41の項目を設け、各項目の現状と実績、取り組みの内容、今後の達成目標等を示すように求めました。

主な項目には、①「教育プログラムの国際通用性と質保証」「国際通用性を見据えた採用と研修」など、教務システムや人事システムでの国際通用性の向上に関する項目、②「教員に占める外国人及び外国の大学で学位を取得した専任教員等の割合」「外国人留学生等の支援体制の構築」など、外国人教員や外国人留学生を増やし、彼らを支援する仕組みの強化に関する項目、そして、③「日本人学生の留学についての支援体制の構築」「TOEFL等外部試験の学部入試への活用」など、日本人学生や受験生にかかわる項目があります。

更に、「年俸制の導入」「IR機能の強化・充実」「学生の実質的学びの時間の確保に関する取組」など、大学の国際化とは一見無関係のように思える項目も含まれています。しかし、海外のトッ

プ大学と同等の教育・研究環境、ガバナンス体制の中で教育や研究に打ち込める環境をつくるためには、これらの仕組みを整えることが必須だと考えています。

SGU事業が、「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業」(グローバル30)など、従来の大学の国際化に関する事業と大きく違う点は、単に英語のみで学位を修得できるコースを設けて、国際的な教育プログラムを充実させるといったレベルではなく、教務システムや人事システムの改革、ガバナンス体制の整備、入試改革など、より抜本的な大学改革が必要となることです。従来の事業では、大学によっては学内の国際担当の部局が一部の学部と組んで国際化に関する教育プログラムを実施するものの、それが全学的な取り組みに発展していかないというケースも少なからず見られました。しかし、SGU事業では、全学的に臨むことが不可欠となっています。

実施期間が最大10年間という長期間にわたることも、これまでの事業とは異なります。普通は5年単位の事業が多いのですが、大学関係者からは「実施期間が5年間では、助走期間とまよりの期間を除くと、実質3年程度の取り組みに終わってしまう」という声がよく聞かれました。そこで、中途半端な取り組みに終わらせないために、10年と設定したのです。ただ、この間に、大学内外の状況が大きく変化することも

### SGU事業採択校

#### ●タイプA

北海道大、東北大、筑波大、東京大、東京医科歯科大、東京工業大、名古屋大、京都大、大阪大、広島大、九州大、慶應義塾大、早稲田大

#### ●タイプB

千葉大、東京外国語大、東京芸術大、長岡技術科学大、金沢大、豊橋技術科学大、京都工芸繊維大、奈良先端科学技術大学院大、岡山大、熊本大、国際教養大、会津大、国際基督教大、芝浦工業大、上智大、東洋大、法政大、明治大、立教大、創価大、国際大、立命館大、関西学院大、立命館アジア太平洋大

あり得ます。4年目と7年目には中間評価を実施する予定にしています。

我々としても、採択された大学が、10年間で国際通用性を備えるための改革を進めて、国際的な競争に耐えられる大学になるための土台をしっかりと築くことを期待しています。

## 採択校で培われた知見を 他の大学にも広げていく

タイプAは国際的評価において上位に入らだけの高い教育・研究力を有する大学を対象としましたが、タイプBでは、研究力の面は問わず、自校の特性を踏まえた上で、教育やガバナンスで特徴のある取り組みを行おうとしている大学を採択しました。

そうしたこともあり、タイプBの採択校を見ると、リベラルアーツ系の大学もあれば工科系の単科大学や芸術大学もあり、都市部の大学もあれば地方大学もあるというように、様々な大学が選ばれています。タイプBの採択校には、それぞれ特色や強みを生かしながら国際化を推し進めてほしいと思います。

タイプBの大学には、他の大学が今後、国際化を進めていく時の先行事例の役割を果たすことも期待しています。前述の41項目には、「シラバスの英語化」「ナンバリング（\*）の実施」「外国語による授業（語学の授業を除く）」などが含まれています。これらの中には、日本の大学が今後ノウハウを確立しなければならない分野が数多くあります。例えば、日本人の学生に対して、専門科目の授業を英語で行うことについては、どの大学も苦労していると聞いています。今後、指導法の開発が求められる分野の1つでしょう。

そこで、SGU事業の採択校が、様々なテーマについての知見を先導的に蓄積することによって、採択校以外の大学が自校の国際化に取り組み際に参考に来るようになればと考えています。特に、タイプBでは、大学の規模や特徴、置かれている環境が多様な大学が採択されています。自校と似た環境にある大学をモデルとしながら、教育やガバナンスの強化を進めていくことが可能になるはずですが、

大学の国際化は、SGU事業に採択された大学だけに求められている課題ではありません。文部科学省では、「私立大学等改革総合支援事業」でもグローバル化を進める大学を支援するなど、他大学に対しても多様な形で国際化に向けた動きを支援していきます。

### 大学入試や大学教育の変化に 高校現場も対応が求められる

SGU事業に採択された大学を中心に国際化が進むことは、高校にも大きな影響をもたらすことが想定されます。

直接的な影響としては、やはり大学入試の変化が挙げられます。今後は、英語の四技能を測定できる外部試験を活用した学部入試や、国際バカロレアの活用、ボランティア活動や海外留学経験を多面的に評価した上で選抜を行う多面的な入学者選抜などが、多くの大学で行われるようになるでしょう。また、入試問題の内容も、よりPIISA型の学力を問うものへと変わると予想されます。大学入試の今後の動きをつかみ、対応していくことが求められます。

もう1つ意識する必要があるのは、生徒を大学に送り込んだ後に、彼らが過ごすことになる大学生活が、高校の先生方が大学教育を受けられていた時代とは全く違うものになるであろうということです。

まず、学部生時代に、海外の大学に留学する

ことは珍しくなくなるでしょう。また、留学をせずに国内にとどまるとしても、外国人留学生と混住型の寮で一緒に暮らすことになったり、ゼミや研究室で一緒に授業を受け、研究活動に携わったりすることになります。また、英語による専門科目を履修する機会も増えます。

大学に入った時に、そうした環境に戸惑うことなく適応し、自らの力を伸ばしていくためには、高校時代までにどんな力を身に付けてきたかがとても大切になります。

大学で外国人教員や外国人留学生とコミュニケーションを取ったり、英語による専門科目の授業を受けたりするためには、高校時代までに英語の四技能のスキルの土台をしっかりと築いていることが不可欠となります。同時に、日本の文化や歴史をよく知っている、日本人としてのアイデンティティを持った生徒を育てることも大事です。自分とは異なるバックボーンで育ってきた人たちの多様な価値観を尊重しながら、時には自分の意見をしっかりと主張できる力や姿勢を育むことも求められます。

高校では、学習指導要領で定められていることをしっかりと実践していただくことが基本になりますが、時代の大きな流れや大学教育との接続を意識して、グローバル化時代に求められる能力の土台となる力を、生徒が確実に身に付けられるように指導していただくことが大切だと考えています。

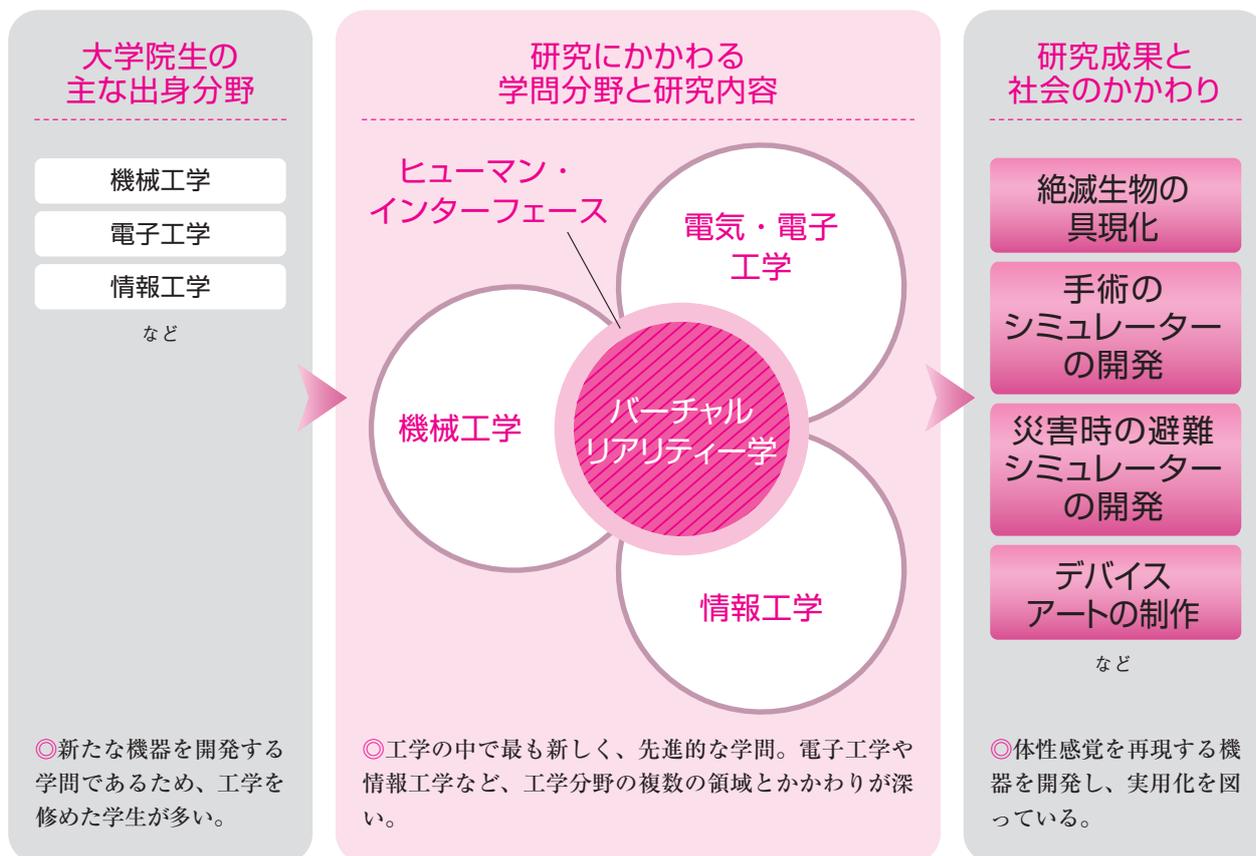
\*授業科目に適切な番号を付し分類することで、学修の段階や順序等を表し、教育課程の体系化を目指す仕組み

### 物体と接触して得られる感覚を再現し 疑似体験のリアリティーを追究

筑波大大学院 システム情報系 岩田<sup>ひろお</sup>洋夫研究室

音は CD、映像はテレビというように、耳や目で得た感覚を再生する機器はたくさんある。ところが、感触や痛み、歩行感覚といった体性感覚を人工的に作り出すことは難しかったため、それらを再生する機器は近年まで存在しなかった。不可能を可能にしたのが、バーチャルリアリティー学の知見だ。30年近くにわたってバーチャルリアリティーを研究している、筑波大大学院システム情報系の岩田洋夫教授に、最先端の機器でどのような体性感覚を再現させるのかを聞いた。

#### フローチャートで分かる岩田洋夫研究室



## 失敗に学びながら改善を重ねられることが大切

バーチャルリアリティー学が求める学生像

試行錯誤を楽しむ姿勢

分野を横断する広い視野

コミュニケーション能力

バーチャルリアリティー学では、テレビで紹介されている商品から絶滅した生物に至るまで、時間・空間を隔てて存在する物体の手触りなどを再生しようとしています。以前はSFの世界でしかあり得なかったようなシステムの開発に取り組んでいるわけです。新しい試みばかりですから、どのように研究すれば良いかは、私たち研究者も実はよく分かっていません。

更に、研究の成果はなかなか出ません。そのため、試行錯誤を「成功するための努力」と考えていると、気力が続かないと思います。そこで、試行錯誤すること自体を楽しむ姿勢が求められるのです。試行錯誤の中では、豊かな発想や鋭いひらめきが必要となりますので、分野を横断した幅広い知識や視野を育む姿勢を大切にしてください。

素晴らしい機器を完成させたとしても、それが実用化されるとは限りません。学外の機関や企業などとの連携が実用化の鍵を握ることが少なくないからです。自分の開発した機器の良さを、研究者以外の多くの人にしっかり伝えられることが重要になるので、コミュニケーション能力が求められます。

**高校生へのメッセージ** 社会に出ると、他者と協同する機会が増えると思います。自分と同じくらい他者を尊重し、気遣いましょう。それが苦手だという人は、チームプレーが必要な球技に挑戦してみてください。チームメイトと一緒にボールを追いかければ、人と人をつなぐ大切な絆が、きっと見えてくると思います。



岩田洋夫 教授

いわた・ひろお 筑波大学院システム情報学教授。博士課程教育リサーチプログラム「エンパワーメント情報学プログラム」プログラマー兼コーディネーター。東京大学大学院工学系研究科博士課程産業機械工学専攻修了（工学博士）。筑波大構造工学系助教などを経て、現職。文化庁メディア芸術祭優秀賞、文部科学大臣表彰科学技術賞などを受賞。著書に「人工現実感生成技術とその応用」（サイエンス社）など。

### 研究を志したきっかけ 新しい機器を開発したいと 人間機械系を専攻

今までにないものを作りたい。私は、子どもの頃からそう思っていました。小学生の頃に熱中したプラモデル作りでは、航空母艦と潜水艦を

結合させるなど、自分の思い描いたイメージを再現しようと改造しました。高校時代は、アポロ計画などの影響で航空宇宙技術の開発が世界的に盛んな時期でしたから、新型の宇宙船開発に憧れました。そのため、大学の工学部に入学した当初は航空工学を学びたいと考えていましたが、やがて機械工学の人間機械系に強い関心を抱くようになりました。

私の学生時代には、人間機械系の研究はまだ進んでいませんでした。そこで、私は新しい機器をこの手で作り出したいと思い、3年生からの学問領域を専攻することにしました。これは、人間と機械との相互作用を円滑にする機器について研究する学問で、現在ではヒューマン・インタラクションと呼ばれる。相互作用が円滑化された例としては、タ

### 研究概要 人体の任意の場所に 体性感覚を伝える 機器を開発する

タッチパネルを触るだけでコンピュータを操作できるスマートフォンなどが挙げられます。

バーチャルリアリティ学とは、ヒューマン・インタラクションの最先端分野であり、触覚や歩行感覚といった体性感覚を人体に伝えるシス

テムの開発を1つの特徴とする学問です。体性感覚は、視覚や聴覚と異なり、人体と物体とが接触してはじめて生じます。それを感知する器官は手に限らず、全身に分布しています。つまり、バーチャルリアリティ学では、人体の任意の場所に任意の物体が触れた時の自然な刺激を人工的に再生しようとしています。私は、バーチャルリアリティで、手に体性感覚を生じさせる機器の開発に取り組んでいます。体性感覚を伝えられる範囲は、研究を始めた当初は指先だけでしたが、今では手のひら全体にまで広がっています。「FEEL EX」という機器では、30センチメートル四方の平面から金属製

の無数の棒を伸び縮みさせることにより、任意の物体に手で触れる感覚を得られるようにしました。以前、小学校の理科の授業に講師として招かれた時に、アノマロカリスという古代生物の硬さや動きなどをプログラミングした「FEELLEX」を持参したところ、これに触った子どもが、「本当にいるみたい！」と喜びました。

ただ、「FEELLEX」は平面から出る棒で物体の形を再現するため、触られる範囲には限りがあります。アノマロカリスでいうと、腹部を触ることは出来ません。そこで現在は、再現した物体にどの方向からも触れる「volflex」という装置を開発しようとしています。空気圧バルーンという特殊な風船をいくつも膨らませる方法で試作していますが、風船の大きさと数、風船を膨らませるためのチューブの配置など、解決すべき課題がまだたくさんあります。近年は、歩行感覚を再現する研究にも力を入れています。地表の硬軟や傾斜といった歩く時に得る感覚も、その場所の印象に大きく影響します。そのため、同じ景色でも、観光

バスの窓から見る時とバスを降りて歩いて見る時とは、かなり異なる印象を受けることがあるのです。この研究の一環として、タイルの上に乗った人間の歩行に応じて自由に動く「ロボットタイル」(写真)を開発しました。現在は、人間が歩く速度にタイルの動きが追いつかないので、もっとスムーズに動くように改善したいと考えています。

機器の開発は失敗の連続ですが、つらいと感じたことは一度もありません。今までにない機器を作るのですから、簡単にうまくいくはずがないのです。失敗から教訓を得て次に生かしてこそ、新しいことに挑戦している実感を得られると思います。



写真 タイルに乗っている人間が足を踏み出す度に、近くにある別のタイルが自動的に人間の足下まで移動してくる

## 研究の展望

### 医療から芸術まで 幅広い分野で 活用が期待される

バーチャルリアリティー学の知見は、様々な分野で実用化されつつあります。例えば、私は医療の専門家と共に、手術のシミュレーターの開発プロジェクトに参加しています。臓器の形状と触感を再現できるようにして、手術技術の向上に貢献したいと思います。

また、バーチャルリアリティー学の知見は、芸術にも生かせると考えています。「ロボットタイル」など、これまでに開発した機器を「デバイスアート」として博物館や美術館に度々展示し、参観者に自由に操作してもらっています。機器と人間との相互作用を楽しむという、新たな鑑賞スタイルを提案しています。

バーチャルリアリティー学の知見を更に広めようと、本学では博士課程教育リーディングプログラム「エンパワーメント情報学プログラム」を始めました。今後も、広い視野と柔軟な発想力を備えた人材を育成していきたいと考えています。

#### 用語解説

##### 1 体性感覚

触覚や圧覚、痛覚など、体表面で感じる皮膚感覚と、運動感覚や位置感覚など、筋肉や腱などで感じる深部感覚の総称。

##### 2 アノマロカリス

古生代カンブリア紀の肉食生物。脊椎はなく、多くの体節を持ち、海に生息した。当時としては最大級の生物だったと考えられ、体長が1メートルに達する化石が見つかった。

##### 3 ソースコード

コンピューターに指示するプログラムの内容を記したテキスト。

# 失敗の要因探しは宝探しのように楽しい



高鳥 光さん

たかとり・ひかる 筑波大グローバル教育院エンバ  
ワメント情報学プログラム一貫制博士課程1年。福井  
県立若狭高校卒業。

**Q** なぜこの分野に進んだのですか

**A** 私は、小さな頃からブロック遊びや粘土細工が好きでした。高校時代に「ものづくり」を専門的に学びたいと思うようになり、大学の工学部に進みました。

工学部でバーチャルリアリティー学を知った時は、そのスケールの大きさに圧倒されました。映像再生装置と組み合わせれば、パリやローマといった外国の街を散歩する感覚を、自分の部屋にいながらにして味

わえるかもしれない。そんな興奮に胸が躍ったことをよく覚えています。また、電子工学や情報工学など、工学の複数の領域の知見を用いる学問であることにも魅力を感じ、私は岩田教授の研究室に進んだのです。

**Q** 岩田教授の研究室での研究内容を教えてください

**A** 岩田教授が設計・製作した、災害時の避難シミュレーターを実用化するための研究に取り組んでいます。この装置は、上下2つのパーツから成ります。上部は視界全面を覆う映像ディスプレイで、任意の都市の風景を撮影者の目で捉えた映像に、炎や煙、瓦礫などのCGを合成した映像が表示されます。下部は歩行機器で、その上に乗ってどの方向にどれほど歩いて、歩行者を機器の中央にとどめられるように作られています。被災時に人間がどのような行動をとるかを正確に把握できるように、被災直後の空間を疑似体験してもらおうと考えています。データを収集・分析すれば、安全性の高い避難モデルを作れると期待しています。

私は、歩行の速度と向きに応じて

映像の流れる速度と向きが変わるように、プログラミンングをしています。この研究に取り組んで一年半ほどの間に、歩行と映像の動きは、かなり連動するようになりました。

ただ、研究では、プログラミンングがうまくいかず、その要因を突き止めるために、1日掛かりでソースコードを点検することもしばしばです。根気のいる作業ですが、宝探しのようなワクワクする感覚があります。失敗の要因を見つけることで、少しずつですが着実に、研究が前進することを実感しているからです。

**Q** 高校生へのメッセージをお願いします

**A** 高校での学習内容をきちんと身に付けておくことがいか

に重要かを、大学で学ぶようになり、身をもって感じるようになります。研究には数学の知識が不可欠ですし、英語の文献を読む必要もあります。高校時代にしっかりと学習しておいて良かったと思ったり、もう少し頑張っておけば良かったと後悔したりすることがよくあるのです。皆さんにも、目の前の学習に全力で取り組んでほしいと思います。後できつと役立つはずですよ。

そんなこと、信じられないという人には、提案があります。興味のある学問や職業の内容を、じっくり調べてみませんか。研究や業務で求められる知識が分かれば、今の学習との関連性も見えてくるでしょう。学習意欲にもつながると思います。

## 私の高校時代

### 体育祭を通して学んだ他者と向き合う姿勢

●私の高校では、体育祭に「応援」という競技がありました。全生徒が学年混合の6つのグループに分かれ、ダンスなどを交えて発表するのです。私は3年生の時、「応援」の練習指導などを行う「応援リーダー」を務めました。

1年生から3年生まで100人ほどのグループですから、メンバーの気持ちはなかなか1つにまとまりませんでした。私は、「応援」の内容に不満があるメンバーからは意見を聞いてなだめ、やる気のないメンバーにはこまめに声を掛けました。腹の立つこともありました。落ち着いた話すことを常に心掛けました。大変だっただけに、体育祭で納得のいく「応援」が出来た時のうれしさはひとしおでした。

冷静に他者と向き合うことの大切さを学んだ体育祭での経験は、今、研究内容に関する議論で、誰かに批判される時や、他者の理論を批判する時にも、役立っていると思います。

アカデミックな学び、国際ボランティアなど、高校生の短期留学を強力バックアップ！

## 「トビタテ！ 留学 JAPAN」 日本代表プログラム高校生コース」募集開始

グローバル化に対応する人材の育成を強化するため、国は海外留学の促進に取り組んでいる。その一環として、2013年、企業や大学と連携して始めたのが「トビタテ！ 留学 JAPAN」(図1)だ。これまで大学生の海外留学を支援してきたが、2015年度は、高校生の短期留学支援を行うことが決定した。その募集に先立ち、文部科学省初等中等教育局の河村裕美視学官に事業内容について聞いた。

自己形成が図られる高校時代に  
多様な価値観に触れてほしい

日本には現在、約330万人の高校生がいますが、期間を問わず、何らかの形で留学をしているのは、そのうちの1%、約3万3000人に過ぎません。これを、2020年までに2%に引き上げたいというのが政府の目標です。

文部科学省の調査(\*)では、将来を含め、留学を希望する高校生は42.3%いて、留学への関心やニーズは高くあります。にもかかわらず、実際には1%の高校生しか留学をし

ていないのは、経済的問題、大学進

学などの進路面の心配、海外で生活する不安、情報の不足など、いろいろなハードルがあるからと捉え、国

は様々な支援を行っています。『VIEW21』の13年度2月号でも紹介している通り、14年度は「社会総掛かりで行う高校生留学促進事業」として、長期・短期の留学経費の支援、

留学経験者や海外勤務経験者などの体験講話、留学フェアの開催などを行い、高校生の留学促進に努めています。

本事業の最大の特徴は、国費としては初めて、短期留学の支援を行っていることです。原則として2週間



文部科学省  
初等中等教育局 視学官  
**河村裕美**  
かわむら・ひろみ

教育助成局財務課、初等中等教育課、特別支援教育課、JSPS国際事業部、大臣官房国際課等を経て現職。SGH、高校生留学支援事業、留学キャンベーン「トビタテ！ 留学 JAPAN」を立ち上げ、事業設計に携わる。

以上1年未満の短期留学に、1人10万円、計1300人を支援しました。短期留学では成果が十分に得られないという意見もありますが、留学に意味があったのか、なかったのか、

かは、本人が将来、判断するものです。国は、短期留学も高校生にとって、十分に意味があるものと考え、支援しています。

日本は良くも悪くも、単一的な価値

\*文部科学省「高等学校等における国際交流等の状況について」(2011年度)

● **概要** 意欲と能力ある全ての日本の若者が、海外留学に自ら一步を踏み出す気運を醸成するために、留学イベントや留学に関するキャリアカフェなどを行うとともに、実際に大学生や高校生の留学を支援する「トビタテ！ 留学 JAPAN 日本代表プログラム」を実施する。国だけでなく、社会総掛かりで取り組むことでより大きな効果が得られるものと考え、各分野で活躍する方々や企業からの支援や寄附などを得て、官民協働で「グローバル人材育成コミュニティ」を形成し、将来世界で活躍できるグローバル人材を育成する。

● **支援企業・団体数** 94社・団体(2014年10月現在)

● **第1期派遣留学生(大学生)の選考状況** 申請1,700人(221校)→採用323人(106校)

\* 「トビタテ！ 留学 JAPAN」ウェブサイトより抜粋

価値観を持ち、多様な文化に触れる機会があまりありません。高校時代の15〜18歳は自己形成が図られる時期であり、大学生よりもまだ意識や価値観が柔軟です。そうした時期に、短期間であつても外国で生活し、各

国の同世代や多様な人たちに触れて、自己形成の一助にしてほしいという思いがあります。

## 海外での生活体験で学べる5つの力

では、海外に出て何が学べるのでしょうか。私は5つの力を挙げたいと思います。

1つめは、課題発見力です。外国人と話すことで、日本の特徴が分かり、外国と日本の違いを見て取り、そして、問題点に気付くはず。日本を外から見られる環境に身を置くことで、客観的なものの見方を鍛える経験が出来ます。

2つめは、コミュニケーション能力です。自分とはバックグラウンドが全く違う人に対して、どのように物事を伝えていくか、そうした力が付くということです。短期間の留学で語学力が身に付くとは考えていませんが、自分を知っている人が周りに誰もいない環境で、人間関係を築いていくたくましさがある程度、身に付けられることでしょう。

3つめは、多様な価値観を受容す

る力です。人と違うことが当然という環境にいると、何かが違っていても気にならなくなります。そうした経験は、日本にいるだけでは出来ません。

4つめは、自己肯定感の醸成です。あまりにも多様な価値観の中にと、自分で自分を肯定しないと生きていけません。自分は日本人であり、日本人としての存在感を発揮することで、自己肯定感を抱くことにもなるでしょう。

5つめは、自己の価値観の形成です。外国に行けば日本人として見られ、周りから「あなたはどっちの？」と聞かれる場面の連続です。自分で考え、判断せざるを得なくなります。そうした経験の積み重ねは、友だちや保護者、教師が良いと言ったもの、ネットや雑誌に良いと書かれているものが良いという価値観から脱し、自分の軸を築きつけになることでしょう。

高校時代に短期留学をしておけば、将来の長期留学へのプレ体験にもなります。大学生で留学する際、生活習慣がよく分らず、慣れるまでに時間が掛かるということがよくある

ようです。しかし、高校時代に留学を経験しておけば、外国で生活するとはどういうことなのか分かってきます。留学生生活をスムーズに始めることが出来るのです。

## スポーツ、芸術、工業、農業等 高校生の様々な意欲を支援

このように、高校生の短期留学には様々な利点があるという考えから、「トビタテ！ 留学 JAPAN 日本代表プログラム 高校生コース(以下、本コース)」を始めます。14日以上3か月以内(1か月以上を推奨)の短期留学に対して、奨学金を支給し、渡航費や授業料を援助する事業です。初年度の15年度は、3000人の支援を予定しています。

「トビタテ！ 留学 JAPAN」は、94の企業・団体から支援を受けて運営しています(図1)。本コースの内容も、企業の方から話を聞き、①アカデミック分野、②スポーツ・芸術分野、③プロフェッショナル分野(専門的な職業)、④国際ボランティア分野と、テーマ別の4つのコースを設けました(P.52図2)。

①アカデミック分野は、サマースクールやサイエンスプログラムなど、教科学習に関連する留学を想定しています。海外の同世代と一緒に学び、切磋琢磨<sup>せつさくたくま</sup>していく。好奇心や探究心が強い生徒の応募を期待しています。

②③④はこれまでにない、テーマ別の留学を支援するコースとなります。

②スポーツ・芸術分野は、スポーツや芸術の分野での留学となります。養成プログラムへの参加、世界大会やコンクールの出場も支援します。

このコースで求めたいのは、留学先でスポーツ・芸術だけを学ぶのではなく、現地の高校生や地域の人たちと交流する場を設けることです。専門性の追究だけでなく、海外での日常生活も経験してほしいと思います。

③プロフェッショナル分野は、専門的な職業に就きたいという高校生の留学を奨励するものです。例えば、工業や農業などの専門高校の生徒が、国際インターンシップや海外の専門学校に通うことなどを想定しています。今、工場の拠点を海外に移す企業が増えています。日本の企業に就職したとしても、工場長などとして

海外に赴任するケースはよくあります。将来の幹部候補として、外国人に会社や自分の考えなどをどうやって伝えればよいかを訓練しておくためにも、高校時代から海外経験が必要だという企業の声を反映させたコースでもあります。

④国際ボランティア分野は、現地でのボランティア活動やNPO・NGOでの活動に対する支援です。学問に関する学習だけでなく、社会貢献活動を通じた学びにも期待しています。

このように、支援対象は学術的な留学ばかりではありません。ですから、選考・審査では、留学計画や本人の意欲・資質を重視したいと思います。語学力や学校の成績に関して基準は設けず、提出いただく成績表などは参考程度にする予定です。どんどん応募してほしいと思います。

### 自己の軸を築くためにも 留学体験は重要

留学したい第一の理由として挙げるのは「語学力を身に付けたい」ですが、一方で、留学しない理由には「語

学力がないから」がよく挙げられます。確かに、短期留学では語学力はあまり上がらないでしょう。しかし、どんなに英語力がある生徒でも、英語が通じないという壁に必ずぶつかります。何とか伝えたいという気持ち

が、語学力を伸ばす、コミュニケーション能力を伸ばす最も大きな動機付けになるのです。留学で語学力が付くのではなく、留学で学習意欲が高まり、帰国後の学習で語学力が付くのです。

留学を支援した生徒が全員、グローバル人材になるとは考えていません。たとえ、留学がうまくいかず、外国にはもう二度と行きたくないと思ったとしても、それも自分を知る経験の1つとなります。どんな結果であれ、留学が自己形成の一端を担えればと思います。留学によって、

先ほどお話しした5つの力を身に付け、自分がしたいこと、自分の軸がはっきりする。そうなれば、結果がどうあっても自分が選んだ道に納得できるはずです。留学経験は、自己の軸を高校時代に築きつけかけとなるで

図2 留学コースと対象とする人物

分野	テーマ	対象とする人物	人数
① アカデミック 分野	世界各国の生徒・学生たちとの切磋琢磨。 例:サマースクール、サイエンスプログラム	知的好奇心が強い生徒。学問分野において秀でた成績を残す可能性のある生徒。	150人
② スポーツ・芸術 分野	世界のトップ指導者に指導を受けたり、世界トップレベルの同世代アスリート、アーティストとの切磋琢磨。 例:トレーニングセンター、国際合宿、各種世界大会・コンクール	上昇志向が強い生徒。体育、芸術活動で秀でた成績を残す可能性のある生徒。	50人
③ プロフェッショナル 分野	世界最先端の取り組み理解や、技術者などの専門家との切磋琢磨。 例:観光、IT、調理、機械、国際インターンシップ、弟子入り、職業訓練	専門的な職業志向の生徒。 *主として専門高校(商業、工業など)、高専(1~3年次)、高等専修学校などの在籍者。	50人
④ 国際ボランティア 分野	グローバルに共通する社会課題の調査活動。 例:現地の生徒・NPO/NGOとの交流を通じて、課題解決に向けた取り組みを体感する	社会貢献活動へ興味関心が強い生徒。	50人

## 「トビタテ! 留学 JAPAN 日本代表プログラム 高校生コース」募集概要

### ●プログラムの特徴

- 「世界に挑戦」「専門的な職業」「社会貢献」等を焦点にした留学を支援
- 学校教育活動の一環として認めた留学計画を支援
- 社会が求める人材像を反映した審査
- 留学中の支援だけでなく、事前・事後の研修、留学後の高校生ネットワークの構築、大学生コミュニティとの連携

### ●申請対象となる留学コースと 2015 年度支援予定人数 \*詳細は図2参照

- ①アカデミック分野 150人 ②スポーツ・芸術分野 50人
- ③プロフェッショナル分野(専門的な職業) 50人 ④国際ボランティア分野 50人

### ●主な支援の内容

- 奨学金:月8~14万円(留学先によって異なる)  
\*14日以上28日未満の場合は4~7万円
- 渡航費:10万円(アジア)または20万円(アジア以外)
- 授業料:30万円を上限として支給

### ●留学計画の申請要件

- 2015年6月下旬~2016年3月下旬までに開始される留学計画
- 留学期間が14日以上3か月以内(1か月以上を推奨)
- 留学先に受入機関が存在する計画
- 在籍校が、教育活動の一環として認める計画

### ●派遣留学生の要件

- 日本国籍を有する生徒または日本への永住が許可されている生徒
- 在籍校で、正規生として在籍する生徒

### ●申請方法・応募書類

- 生徒が主体的に作成した計画、または生徒の留学に対する目的や考えが含まれた計画を、学校を通じて「独立行政法人日本学生支援機構」に申請
- 留学計画、エッセイ(「自己PR」「留学の目的・期待成果」)、学校長の推薦状、成績表(学業、入賞歴)

### ●審査の観点・方法

- 企業関係者を含む有識者による審査
- 留学計画の審査
- 応募者の資質審査 例:実績評価、能力評価、意欲の高さ評価、社会貢献志向性評価

### ●スケジュール

- 公募期間:2015年1月上旬頃~3月上旬頃
- 選考期間:2015年3月上旬頃~5月上旬頃  
1次(書類):3月上旬頃~4月上旬頃 2次(面接):4月上旬頃~5月上旬頃
- 採否決定:2015年5月中旬頃
- 事前研修:2015年6月上旬頃

\*プログラムの内容は全て2014年11月時点のものです(内容は変更される場合があります)。

詳細は専用のウェブサイトでご覧ください。  
応募フォームも  
右記サイトにあります。



<http://www.tobitate.mext.go.jp/hs>

しょう。  
もちろん、その留学によって、大  
学生になったら長期留学をしたい、  
将来は海外で活躍したいと思っ  
たらえれば、それがベストだと思いま  
す。しかし、何事も経験しないと分  
かりません。支援した高校生のうち  
1人でもよいので、国際社会で活躍

する人材となってくればと考えて  
います。  
高校の先生方には、生徒の留学し  
たいという意欲を後押ししていただ  
ければと思います。「留学したいけれ  
ど、自分には無理」という生徒を勇  
気付け、一步を踏み出させてほしい  
のです。また、大学生は自分の意志

で留学しやすいと思いますが、高校  
生は行きたいと思っても、保護者の  
許可がなければ行くことが出来ませ  
ん。保護者の理解を得ることもにも協  
力していただきたいと思っています。  
短期間でもたくさん刺激を受け、  
日本に在るだけでは出来ない経験を  
し、学ぶ意欲を高めてほしい。そして、

帰国後は自分が留学で得たことを友  
だちや家族などに伝える。「私は留学  
してすごく良かった。みんなも行こ  
うよ」、そうした留学の輪が広がるよ  
うなプログラムにしたいと思っています。  
意欲ある高校生の皆さんの応募をお  
待ちしています!

### 自分たちで考え行動させ、自己肯定感を高める

10月号の特集で伝えていた「軸」と「修正力」という言葉は新鮮に響いた。指導において力のある言葉だと思ふ。特に、生徒が何かを経験した後に「君たちの力ならもっと出来る」という声掛けは、自己肯定感を高め、成長させることに適しているだろう。そのため、自分たちで考えさせ、行動させるのは効果的はずだ。一方で、自分の出来る範囲でしか行動してない学力層の生徒も多い。やはり教師が背中を押してあげる必要があると思う。

〔宮城県・私立常盤木学園高校・高谷将宏〕

### 10年後を見据えた人材育成に夢を感じる

混沌とした時代だからこそ、夢を持って仕事がしたいと最近感じており、8・10月号の特集の共通テーマ「10年後を見据えた人材育成」には非常に共感した。引き続き、ICT教育やグローバル人材育成、新課程といった様々な視点から、夢を感じられる記事を取り上げてほしい。〔長野県長野西高校・佐藤洋二〕

### 生徒の短期目標と学習意欲の関係の明確化を

10月号の「新課程 指導最前線」で佐賀県立致遠館中学・高校の尊田和寿先生の「2次の模試ではここまで頑張ろう」と短期目標を持たせませす。それを1つひとつ達成することによって、徐々に自信を高め、自ら学習に向かう意欲を育みたいと考えています」という言葉をかみしめた。本校では、個別指導で生徒の学力を高める努力をしているが、教師が生徒の短期目標と学習意欲・進路意欲の

## Reader's VIEW

Volume 5

読者のページ

### 読者の先生方からのご意見を紹介します

関係を明確にする努力が欠けているように感じた。  
〔徳島県・匿名希望〕

### 生徒が自ら動き、成長する場を設ける

10月号「指導変革の軌跡」の広島県・私立広島女学院中学校の記事の「生徒が能動的に活動できる場を、私が提供していなかった」という先生の言葉は、多くの学校に当てはまるのではないかと思った。生徒をもっと信頼して、自由に考えさせる時間と場面を与えれば、生徒は自ら動き出し、成長していくものだと思っている。同校のSGHの取り組みは、これからの生徒を大きく成長させるものと期待している。  
〔和歌山県・匿名希望〕

### 計画重視の取り組みに変え、生徒の自己管理能力を養う

10月号「生きたデータの徹底研究」は、本校の取り組みを振り返る機会となった。本校では、学習時間記録は「実績」より「計画」重視へ方針を変更しつつある。1日の授業終了後に、その日に自宅ですべきことを書き添える取り組みも始めた。問題点もあり、うまくいっていることばかりではないが、生徒に自己管理能力を身に付けさせるために継続していきたい。

〔広島県・広島市立沼田高校・正木勝治〕

### 教師川柳

厳冬の季節過ぎればきっと春

奈良県・私立奈良育英高校・久保貴芳

### 編集後記

◎今号も、現場の先生方へのヒアリングや取材を通じて、様々な気付きを得ることが出来ました。その1つに、「軸」と「修正力」の関係性があります。この2つは、どちらを先に身に付ければよいというものではなく、茨城県立竹園高校の植木明美先生がおっしゃっていたように、不可分な関係にあります。つまり、「軸」を磨き上げる中で「修正力」は高まるのであり、「修正力」を発揮することで「軸」がつくられていくということです。次号では、どのような発見があるのか、今から楽しみです。(柏木)

### 『VIEW21』高校版はウェブサイトでもご覧いただけます!

本誌の最新号、及びバックナンバーは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで公開しております。誌面のPDFや「生きたデータの徹底研究」の図版もダウンロードできます。ぜひご利用ください。

詳しくは

VIEW21 高校版

検索

<http://berd.benesse.jp/magazine/kou/>



VIEW21 12月号 Vol.5

2014年12月18日発行

発行人 山崎昌樹  
編集人 春名啓紀  
発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所  
印刷製本 凸版印刷(株)  
編集協力 (有)ペンダコ  
執筆協力 中丸 満、二宮良太、長谷川敦  
撮影協力 荒川 潤、谷口 哲、ヤマガチイキ  
イラスト協力 カモ

VIEW21編集部  
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング14階

©Benesse Corporation 2014

VIEW21

2015  
February  
2月  
Volume 6

次号は  
2月20日発行(予定)  
『VIEW21』高校版は  
年6回の発行です

## COVER STORY

教師と生徒の肖像

# 悔いなく、全力

表紙の学校 仙台育英学園高校 庄司昌弘先生

PDF版では写真を公開していません。

難関大進学から専門技能が必要とされる就職まで、生徒の希望進路に応じて全6コースを擁する仙台育英学園高校。赴任以来14年間、様々なコースを受け持ってきた庄司昌弘先生が、どんな時も指導の根底に抱くのは、生徒の目を社会に向けさせることだ。例えば、制服をきちんと着ていなければ、何度でも呼び止めてその場で直させる。生徒にしつこいと思われても、公の場で身なりを整えることは社会のルールだと説く。昨年度、特別進学コースの学年主任に就いてからは、1年生全員を東北大のオープンキャンパスに参加させ、医学・薬学・医療看護系志望者には看護体験を勧めた。更に、有志の生徒たちを「みちのくYOSAKOIまつり」に出場させたことも。1年生から学校外活動を積極的に行って、生徒を社会に触れさせる。

生徒にとって身近な社会人として、自身の経験を率直に語る。高校時代、自分がどう生きればよいのか悩んだこと、ある先生に出会い、自分もどうしても教師になりたくて4浪して大学に入ったことなど、生徒に自分の全てを話す。夢を諦めず、家族に支えられながら踏ん張ったからこそ、教壇に立つ今の自分がいるという思いがある。「合格はゴールではなく、1つの過程。どんな進路を選んでも勉強や行事などに全力で取り組むことが、その後の人生を拓くのだと知ってほしい」。

生徒曰く、「庄司先生は怒るとすごく怖いし、厳しいけれど、話しやすい」。「合唱同好会をつくりたい」と相談を受ければ顧問を引き受け、学園祭の成功に向けて奔走する生徒会長には、その思いを引き出しつつ、アドバイスを。「ここで出会ったのは何かの縁。生徒が充実した3年間を送り、自分の納得できる選択が出来るよう、全力でとことん向き合います」。

# VIEW21

ビュー21 高校版 Volume5 2014年12月号

2014年12月18日発行 / 通巻第349号 飛行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所  
© Benesse Corporation 2014

お客様  
サービスセンター

【フリーダイヤル】 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17